

〇一 朝鮮關係ノ分

朝鮮東學黨變亂鎮定ノ爲メ朝鮮國政府ハ援テ清國ニ請ヒ清國ハ之ニ應シテ兵員ヲ派遣スル模様アル旨五月下旬ヨリ六月初旬ニ涉リ在朝鮮杉村臨時代理公使ヨリ數次急報アリタルヲ以テ帝國政府ニ於テハ朝鮮ニ於ケル帝國ノ利益ヲ保護スル爲メ兵員派遣ノコトニ決シ夫レト同時ニ歸朝中ノ大鳥特命全權公使ニ歸任ヲ命シタリ當時同公使ニ交付シタル訓令ハ別紙一號ノ如シ同時杉村臨時代理公使ニ命シテ我兵派遣ノコトヲ朝鮮政府ヘ通知セシメタルニ該政府ノ驚愕一方ナラス京城靜穩ナルカ上ニ東學黨ノ亂モ略鎮定ニ歸セリ從テ帝國ヨリ出兵ノ要ナキノミナラス若シ此靜謐ノ日日本政府兵員ヲ派シ公使館ヲ護衛スルニ於テハ他國モ亦其例ニ倣フコトアルヘク且ツ日本兵京城ニ入ラハ人心ノ大激昂ヲ來スヘシトノ口實ヲ以テ百方我兵ノ入韓ヲ防止セントセシモ杉村臨時代理公使ハ我政府ハ濟物浦條約ニ依リ兵員派遣ノ權利ヲ有スルモノニシテ今其權利ニ從ヒ出兵スルモノナレハ敢テ朝鮮政府ニ於テ之ヲ拒ムコトヲ得ストテ之ヲ聞カサル内大鳥公使ハ七月九日軍艦八重山ニテ仁川ニ着シ翌十日海兵四百二十名及巡查二十名ニ護衛セラレテ

京城ニ入レリ然ルニ同公使入京後實況ヲ視察スルニ京城ハ甚々平穩ニシテ
大ニ本邦出發前ニ想像シタル所ト異ナリ從テ多數兵員派遣ノ必要ヲ看サル
ノミナラス他ノ質問ニ對シ答辯ニ苦ミ且ツ外交上紛議ヲ醸センコトヲ恐ル
ル故多數ノ兵員ヲ朝鮮ニ上陸セシメサル様取計ハレタキ旨別紙二、三、四、五、六
號電報ノ如ク具申アリタルモ我兵既ニ出發ノ後ナルヲ以テ之ヲ召還スルコ
トヲ得ス且ツ永ク仁川等ニ駐在セシムルニ於テハ遂ニ京城ニ入ルノ機會ヲ
失シ一事ヲ爲スナクシテ空シク派遣ノ大兵ヲ歸國セシメサルヲ得サルニ至
ルモ計ラレス果シテ此ノ如キ場合ニ至ラハ政畧上甚々面白カラサルヲ以テ
多少外交上ノ紛議ヲ來スコトアルモ寧ロ此際派遣軍ヲ京城ニ入ラシムルニ
若カスト決シ外務大臣ヨリ別紙七、八、九、十號ノ如ク大島公使へ訓令セリ然リ
而シテ此頃朝鮮今回ノ内乱ハ一時鎮靜ニ歸スルモ依然其政治ニシテ改良ス
ル所ナクンハ再ヒ内乱起リ爲メニ日清間ノ交渉ヲ惹起スコトナキヲ保セサ
ルヲ以テ此機ヲ以テ清國ト協同シ兩國ノ力ヲ以テ朝鮮ノ内政ヲ整理セシム
ルヲ得策ナリトシ其意ヲ清國政府ニ通スルコトニ閣議一決セリ而シテ清國
ヲシテ我提議ニ應セシメ兩國間ニ談判ヲ開クニ就テハ如何ナル名義ヲ付シ

P.V.M. 3 96

テモ満足ノ結果ヲ得ル迄ハ我兵ヲ駐韓セシムルコト必要ナルヲ以テ別紙十一號ノ通り大鳥公使ニ訓令セリ然ルニ清國ハ我提議ニ應セス斷然之ヲ拒絕シタルヲ以テ帝國政府ハ獨力朝鮮政府ニ内政改革ノ勸告ヲ爲スコトニ決シ六月二十四日加藤外務書記官ヲ朝鮮ニ派遣シテ親シク大鳥公使ニ其意ヲ傳ヘシメ且ツ朝鮮政府ヘ申入ルヘキ改革ノ大要ヲ訓令シ續テ同月廿八日詳細ノ條目ヲ舉ケ之ヲ朝鮮政府ニ申入レ其實行ヲ期スヘキ旨ヲ大鳥公使ニ訓令シ栗野政務局長ニ出張ヲ命シテ尙ホ其足ラサル處ヲ口述セシメタリ訓令ノ趣旨ハ別紙十二號、十三號、十四號ノ如シ是ヨリ先大鳥公使ハ朝鮮政府内支那黨ノ勢力ヲ有スル間ハ内政改革等ノ議ヲ提出スルモ到底我目的ヲ達スル由ナキニ付此際日清ノ衝突ヲ招キ清國ノ勢力ヲ打破スルコトヲ必要ナリト認メ其機會ヲ得ンカ爲メ切リニ國王ニ謁見ヲ求メ遂ニ廿六日ヲ以テ謁見ヲ得テ内政改革ノ上奏ヲ呈シ併セテ改革取調委員ノ任命アラシムコトヲ請求セル際恰モ廿八日ヲ以テ加藤書記官ノ來着セルニ會シ帝國政府ノ意嚮ヲ詳知スルヲ得タルヲ以テ問題ヲ獨立屬邦ト内政改革ノ二種ニ區別シ頻リニ朝鮮政府ヘ迫リ始メタリ其顛末ハ別紙十五號ニ詳ナリ次テ七月三日大鳥公使ハ

P.V.M. 3 97

別紙十六號改革案ヲ具シ朝鮮國外務督辦ニ差出シテ國王ヘ傳奏ヲ求メ同月七日更ニ公文ヲ發シテ翌八日マテニ諾否ノ決答ヲ促シタルニ滿朝反對ノ景況アルニ拘ハラス之ヲ拒絕スルノ力ナク同日ヲ以テ内務督辦申正熙同協辦金字漢曹寅承ノ三名ヲ改革取調委員ニ任命シタリ(別紙十七號參照)然レトモ是ハ一時我銳鋒ヲ避ケ其内清國及諸外國ニ依頼シテ我駐在兵ヲ撤退セシメントノ姑息策ニ出テタルモノニシテ眞實ニ我提案ニ從ヒ國政ノ改革ニ從事スルノ意アルニアラサルカ如シ故ニ大鳥公使ハ此時ヨリ我目的ヲ達スルニハ我兵ヲ以テ王城ヲ圍ミ力迫スルノ外策ナキコトヲ看破シ其案ヲ具シテ電訓ヲ乞ヘリ(別紙十八號參照)此際恰カモ北京ニ於ケル英國公使ノ仲裁モ失敗シタレハ此上ハ斷然タル處置ニ出ツルノ外ナキニヨリ如何ナル口實タルヲ問ハス成ルヘク世間ノ批難ヲ招クコト少ナキモノヲ撰ミ活潑ノ運動ニ着手スヘキ旨外務大臣ヨリ大鳥公使ヘ訓令シ(別紙十九號參照)又鐵道敷設電信架設木浦開港等實利的要求ニ關スル我目的ヲ達スルコトヲモ愈ラサルヘキ旨電命セリ(別紙二〇號參照)大鳥公使ハ七月十日及十一日ノ兩日ヲ以テ朝鮮政府ノ改革取調委員ト會同シ前日差出シタル改革綱目ノ説明ヲ爲シタル上三

P.V.M. 3 98

日ヲ限リ決答ヲ求メタルニ果サス延ヒテ十六日ニ到リ再ヒ改革委員ト會同シタルモ要領ヲ得ス依テ大鳥公使ハ是非トモ我勸告ニ應スヘキコトヲ迫リタルニ委員ハ漸ク承諾ノ色ヲ顯シ書面ヲ以テ同意ノ旨ヲ回答スヘキ旨ヲ約シテ相分レタルニ同日夕刻外務督辦及改革委員ハ各書面ヲ以テ日本政府ノ提議ニ係ル改革案ハ朝鮮政府ハ喜ンテ之ヲ容ルヘキモ大軍ヲ駐メ期限ヲ定メテ改革ノ實行ヲ迫ルハ聊カ内治干預ノ嫌アルノミナラス人心ヲ動搖セシムルコト尠ナカラス且朝鮮政府ニ於テ日本ノ請求ニ應セハ他國ヨリモ各其好ム所ニ從ヒ種々ノ請求ヲ受ケ遂ニ底止スル處ヲ知ラサルニ至ルヘク果シテ如此ナレハ朝鮮ノ獨立ヲ傷クルノ結果ヲ生スヘキニヨリ先ツ我留兵ヲ撤退セラレタキ旨ヲ照會セリ別紙二十一號及二十二號參照爰ニ於テ平和ノ手段ニヨリ我目的ヲ達スルノ見込殆ント盡キタルヲ以テ大鳥公使ハ朝鮮政府ノ異議アルニ拘ハラス京城釜山間軍用電線ノ架設ニ着手セシメ兵營ノ設置ヲ促カシ中朝商民水陸貿易章程中江通商章程及吉林通商章程ヲ廢棄スヘキコトヲ照會シ又在牙山清兵ノ撤回ヲ清國政府ニ請求スヘキ旨ヲ照會シ此最後ノ請求ニ對シテハ廿二日ヲ期シテ回答スヘク若シ其期ヲ後ル、ニ於テハ

P.V.M. 3 99

處決スル處アルヘキ旨ヲ言送リタルニ期ニ至リ甚々漠然タル回答ヲ送リ到底満足ヲ得カタクコト判然タルニヨリ翌廿三日早朝我兵ヲ以テ王城ヲ圍繞セシカ爲メ之ヲ王宮ノ方ニ進マシメタルニ僥倖ニモ彼ヨリ發砲シタルニヨリ我兵之ニ應砲シ遂ニ韓兵ヲ逐ヒ退ケテ關内ニ進入セリ續テ大院君ハ國王ノ召ニ依リ參内シ間モナク國王ハ外務督辦ヲ使トシテ大鳥公使ヲ召請シタルニヨリ公使ハ直ニ參内シタルニ大院君國王ニ代リテ進謁ヲ受ケ同君カ國王ヨリ政務統轄ノ任ヲ受ケタルコトヲ披露シ併セテ將來大鳥公使ノ贊助ヲ請フヘキ旨ヲ述ヘタリ別紙廿三號參照爰ニ於テカ局面全ク一變シ朝鮮新政府ハ我提案ノ趣旨ニ從テ改革事業ニ着手スルコト、ナリ其第一着トシテ大院君ハ閔族ヲ放逐シ進歩主義者ヲ以テ政府ヲ組織シタリ而シテ一面ハ清國領事唐紹儀ニ向テ中江章程水陸通商章程吉林貿易章程ノ廢棄ヲ宣言シ一面ハ彼ニ代リテ在牙山清兵ヲ掃攘センコトヲ大鳥公使ニ請ヘリ別紙廿四號ノニ二十四號ノニ參照仍テ大鳥公使ハ其請ニ應シ大島旅團長ニ傳致シタルヲ以テ我兵ハ七月二十九日ヲ以テ牙山ニ進撃シ一戰シテ同地駐在ノ清兵ヲ擊テ盡ク之ヲ走ラセリ續テ清國ニ對シ開戦ノ詔勅アリタルヲ以テ帝國ハ一意其

P.V.M. 3 100

鋒ヲ清國ニ向クルコト、ナリ朝鮮ハ清國ニ對シ我同盟國トナレリ爾後内政
改革事業モ漸次其歩ヲ進メツ、アルノ景況ナリ而シテ大島公使ハ日、韓兩國
ノ間ニ於ケル既往將來ノ關係ヲ定ムル爲メ朝鮮政府ト別紙二十五號ノ如キ
假條約ヲ訂結シ次テ朝鮮ニ於ケル我陸海軍ノ運動ヲ便ナラシムル爲メ八月
二十六日ヲ以テ別紙二十六號ノ通り清國ニ對スル攻守同盟ノ約ヲ結ヘリ而
シテ朝鮮ニ對スル帝國政府ノ方針ハ別紙二十七號、二十八號ノ通り大島公使
ヘ訓令シ而シテ朝鮮ニ對シ帝國ノ好意ヲ示ス爲メ八月下旬帝室ヨリ御慰問
使トシテ西園寺樞密顧問官ヲ朝鮮國王ノ許ニ派遣セラレタリ

P.V.M. 3 101

REEL No. 1-0049

0102

(別紙第一號)

○朝鮮國へ兵員派遣ニ付大島公使へ訓令

機密送第一九號

今般閣下朝鮮京城へ御歸任相成候上ハ左記ノ件々御心得置御遵行相成度候

一目下朝鮮國內ニ起リ居ルトコロノ變乱ニシテ此上一層其區域ヲ廣メ帝

國公使館、領事館及居留帝國臣民ニ危險ヲ及ホスノ虞アリト認メラル、

トキハ其旨直チニ電報セラルヘキコト

一變乱ノ情形如何ニ拘ハラヌ清國政府ヨリ兵員ヲ朝鮮國ニ派遣スヘキ情

形確ナリト認メラル、トキハ其旨直チニ電報セラルヘキコト

前記二項ノ場合ニ於テハ帝國政府ハ直チニ兵員ヲ派遣スヘシ尤日韓ノ關

係ハ明治十五年濟物浦條約第五款及明治十八年七月十八日高平臨時代理

公使ノ知照ニ基因シ又日清ノ關係ハ明治十八年天津條約第三款ノ手續ヲ

經テ出兵シタルモノト心得ラルヘキコト

但シ閣下ノ着任前ト雖モ帝國政府ハ在京城杉村臨時代理公使ノ報告ニ依

テ出兵スルコトアルヘシ

P.V.M. 3 102

五

一帝國政府出兵ノ目的ハ帝國公使館、領事館ヲ護衛シ及居留帝國臣民ヲ保
護スル爲メナリト雖モ若シ朝鮮政府ニ於テ變乱鎮定ノ爲メ帝國兵力ノ
援助ヲ乞フトキハ該地出張ノ帝國陸軍總指揮官ト協議ノ上朝鮮政府ノ
請求ニ應セラルヘキコト

一帝國兵員ヲ容ルヘキ營舎ハ濟物浦條約第五款ニ依リ朝鮮政府ヲシテ之
カ設置修繕ノ責ニ任セシメラルヘク但シ若シ該政府ニ於テ適當ナル設
備ヲ爲シ能ハサルトキハ兵員駐屯ニ便宜ナル場所ナリトモ貸與セシメ
ラルヘキコト

一帝國兵員ニシテ若シ清國兵員ト同シク一地ニ駐屯スルカ若クハ又均シ
ク朝鮮政府ノ請求ニ依リ戰地ニ出陳スル場合アルトキハ彼此衝突ヲ引
起サ、ル様十分意ヲ用ヒラルヘキコト

一若シ清國官吏ヨリ我出兵ノ理由ヲ問ヒタルトキハ天津條約第三款ニ照
ラシ朝鮮國內ニ變乱アリ帝國公使館、領事館及居留帝國臣民ノ性命財產
ニ危險ヲ及ホスノ虞アルニ因テ出兵シタルモノニシテ該條約ノ定ムル
所ニ遵ヒ業已ニ清國政府へ行文知照セリト對ヘラルヘシ而シテ若又尙

P.V.M. 3 103

其上ニ詳問セントスルカ如キコトアルニ於テハ直チニ帝國政府ニ向テ
詳問セラルヘシトノ旨ヲ對ヘラルヘキコト

一若又京城駐在外國官吏ヨリ我出兵ノ理由ヲ問フ者アルトキハ帝國政府
ハ濟物浦條約第五款及天津條約第三款ニ依リテ出兵シタルモノニシテ
決シテ他意アルコトナキ旨ヲ保証セラルヘキコト

一乱民京城ニ闖入スルニ當リテ朝鮮政府ニテ該地ニ在ル各外國公使館領
事館及外國人民ヲ保護スル力ナキニ因リ各國使臣若クハ領事ヨリ我カ
衛護ヲ乞フトキハ該地出張ノ陸軍總指揮官ト協議シテ可及丈ノ衛護ヲ
與ヘラルヘキコト

一右ノ外茲ニ列記セサルノ事項ニシテ急速ヲ要シ電訓ヲ請ハル、暇ナキ
トキハ閣下ニ於テ臨機處分セラルヘキコト尤此場合ニハ後ニテ電信又
ハ書信ニテ速ニ事狀ヲ具報セラルヘキコト

右及訓令候教具

明治二十七年六月四日

外務大臣陸奥宗光

朝鮮駐劄特命全權公使大島圭介殿

P.V.M. 3 104

〇六

(別紙第二號)

六月十一日大島公使ヨリ外務大臣ヘ左ノ電報達セリ

日本兵士出發ニ關シ六月十日杉村宛ノ貴電讀了ス京城ハ平穩ナリ暴徒
ニ關スル事情ハ異ナシ追テ電報スルマテハ餘ノ大隊派遣見合ハサレタ
シ唯々其何時ニテモ出發スルコトヲ得ル様準備セシメ置カレタシ

P.V.M. 3 105

〇七

(別紙第三號)

六月十二日大鳥公使ヨリ外務大臣へ左ノ電報達セリ
大島少將出發ニ關スル貴電接受セリ京城目下ノ形勢ニテハ過多ノ兵士
進入ニ對スル正當ノ理由ナキヲ恐ル其筋へ申込レ本使ノ命令アルマテ
兵士ヲ上陸セシメサル旨大島ニ電訓アル様致サレタシ

八

P.V.M. 3 106

(別紙第四號)

六月十三日大鳥公使ヨリ外務大臣へ左ノ電報達セリ
六月十一日夕電報セシ如ク過多ノ兵士ヲ上陸セシムルトキハ外交上ノ
紛議ヲ來スヘシ本使カ必要ト認ムル兵士ノ外ハ悉ク對島ニ退却セシメ
テ命ヲ俟タシメムルコト望マシ陸軍大臣ト商議セラレ此意ヲ太島ニ訓
令セラレンコトヲ希望ス

九

P.V.M. 3 107

REEL No. 1-0049

0105

(別紙第五號)

六月十三日大島公使ヨリ外務大臣へ左ノ電報達セリ
和歌浦丸ニテ運送ノ兵士ハ多分六月十三日正午到着ノ上今朝出發ノ海
軍兵ニ代ルヘシ過多ノ兵士ヲ上陸セシメサルコト目下極メテ緊要ナリ
參謀本部ト商議セラレ成ルヘク少數ノ兵士ヲ上陸セシメ且ツ之ヲ仁川
ニ止メ置ク様大島ニ訓令セラレタシ

十

P.V.M. 3 108

十一

(別紙第六號)

六月十六日大島公使ヨリ外務大臣へ左ノ電報達セリ
全羅道ニテハ暴徒敗北シ京城ニハ清兵派遣セラレスカル境遇ニ於テ
ハ我公使館及人民保護ノ爲メ多數ノ兵士ヲ派遣スルノ必要ナキノミナ
ラス又清國、露國及其他諸國モ日本ノ意向ニ疑ヲ抱キ各其兵士ヲ朝鮮國
へ派出スルニ至ルヘキ大慮アリ故ニ目下ノ事情變動シテ益我ヲ危険ニ
陷レシムルノ有様ニ至ルニ非サルヨリハ京城ニ四千ノ兵士ヲ進入セシ
ムルノ好理由ヲ見ス日本政府カ其出テハ右ハ全ク論外ニ屬ス在東京臨時代
理公使ヨリ清國ハ猶ホ二千ノ兵ヲ朝鮮ニ増發スヘシトノ電報アリタレ
トモ此電報ニ關シ袁世凱ハ日本兵仁川ニ上陸セサルニ於テハ右ノ兵ハ
派遣セラレサルヘシト確言セリ當地ニ露國兵朝鮮ニ派遣セラレヘシト
ノ風説アリ至急其眞偽ヲ探ラレタシ

P.V.M. 3 109

(別紙第七號)

六月十一日外務大臣ヨリ大島公使へ左ノ電報ヲ發セリ

六月十一日付貴電接手セリ自餘ノ大隊ハ六月十一日午後住ノ江丸仙臺丸及山城丸ニテ既ニ皆出發セリ故ニ閣下ノ建議ニ就テハ如何トモスル能ハス牙山ノ清兵ハ内地ニ進ムヘカラストノ命令ヲ受ケタル由風説アリ眞偽如何

日十三

P.V.M. 3 110

日十三

(別紙第八號)

六月十二日外務大臣ヨリ大島公使へ左ノ電報ヲ發セリ

大島部下ノ軍隊ノ上陸ヲ差留ムルコトハ出來難シ然レトモ閣下ヨリ其京城ニ入ルコトヲ求メラル、マテ仁川ニ駐屯セシムルヲ得ヘシ此事貴意ニ適セハ其旨大島ニ通告セラレヨ若シ閣下ニ於テ望マル、ナラハ參謀本部ヨリ仁川ニ留マルヘキ旨大島ニ電訓スヘシ一戸部下ノ軍隊京城ニ入ルコトニ就テハ閣下ニ於テ異議ナカルヘシト信ス

P.V.M. 3 111

(別紙第九號)

六月十三日外務大臣ヨリ大島公使へ左ノ電報ヲ發セリ

貴意ニ從ヒ參謀本部ヨリ大島ニ其兵ヲ仁川ニ駐屯セシムルノ命令ヲ與ヘタリ閣下ヲシテ兵士ノ京城ニ入ルコトヲ止メント求メシメタル理由如何清國及朝鮮ノ方ニ於テ多少ノ恐駭ヲ生スルハ初ヨリ充分豫期シタルコトハ閣下ノ承知セラル、所ナリ若シ大島部下ノ兵ニシテ永ク仁川ニ留マルトキハ恐ラクハ京城ニ入ルノ機會ヲ失フヘシ若シ何事ヲモ爲サス又ハ何處ヘモ行カスシテ終ニ同處ヨリ空シク歸國スルニ至ラハ甚々不体裁ナルノミナラス又政策ノ得タルモノニアラス若シ特ニ重大ノ故障ナキニ於テハ無要ノ遲滯ナク該兵ヲ京城ニ入ラシムルコト寧口勝レルニアラスヤ右ノ理由及意見ヲ電報セヨ

(別紙第十號)

六月十三日外務大臣ヨリ大島公使へ左ノ電報ヲ發セリ

軍隊ノ一小部ヲ仁川ニ留置スルノ必要モアルヘケレトモ六月十三日朝ノ發電ニ於テ述ヘタル如ク外交上少シク紛議アルヘキニモ拘ハラス大島部下ノ本隊ヲ京城ニ入ラシムルコト得策ナリ成ルヘク速ニ平和ニ復スルコト極メテ望マシキヲ以テ若シ清國兵カ猶ホ牙山ニ留テ進軍セサルニ於テハ閣下ハ日本兵ヲ以テ暴徒ヲ鎮定スヘキ旨申込レテ差支ナシ朝鮮國ニ對スル將來ノ政策ニ就テハ日本政府ハ止ムヲ得ス強硬ノ處置ヲ執ルニ至ルコトアルヘシ本大臣ハ之ニ付伊藤伯ト商議中ナリ

(別紙第十一號)

六月十五日外務大臣ヨリ大島公使へ左ノ電報ヲ發セリ

六月十四日正午發貴電中ニ開陳セラレタル理由ハ了悉セリ然レトモ現
今ノ暴徒鎮定シ平和ニ復スルモ猶ホ今後日清間ニ紛議ヲ生セシムヘキ
出來事アルハ避クルコトヲ得サルヘシ斯カル事情アルヲ以テ内閣會議
ハ斷然タル處置ヲ執リ清國ト協力シテ朝鮮政府ノ組織ヲ改革シ此目的
ニ對シ共同委員ヲ任命センコトヲ清國ニ迫ルコトヲ決議セリ此事ハ明
日本大臣ヨリ在日本清國公使へ提議スヘシ此事ハ極メテ秘シ置袁世凱
ハ勿論其他何人ニモ洩ラスヘカラス清國ト此事ヲ取極ムルニハ其談判
ノ繼續スル間ハ如何ナル口實ヲ用フルモ我兵ヲ京城ニ留メ置クコト最
モ必要ナリ其故ハ李鴻章ハ日本兵ヲ退去セシムルコトニ甚々苦心シ縱
令清兵ヲ退去セシメテモ其目的ヲ遂ケント欲スル如ク見レハナリ我
兵撤回運延ノ理由トシテ閣下ハ最モ公然ニシテ表向キタル方法ニヨリ
公使館員若クハ領事館員ヲ實況取調トシテ暴動ノ地方ニ派遣スヘシ而
シテ右取調ハ成ルヘク之ヲ緩漫ニシ其報告書ハ故サラニ平和ノ狀態ニ

成ルヘク反對セル模様ヲ含メテ之ヲ作ラシムルコト最モ望マシ若シ保
護ノ必要アラハ巡查ヲ隨行セシムルモ可ナリ露國ヨリ朝鮮ニ出兵スル
トノ事ニ就テハ本大臣ト露國公使トノ談話并ニ在英日本國公使ノ電報
ニ由テ察スルトキハ當分ノ處其恐ナキカ如シ若シ朝鮮政府ヨリ平和及
秩序回復シタリト稱シテ我兵ノ撤去ヲ請求スルトキハ日本政府初メ閣
下自分ニ於テモ満足スル所アランカ爲メ實況取調トシテ特ニ派遣シタ
ル官吏ノ報告ヲ俟タサルヘカラスト答ヘ置クヘシ

P.V.M. 3 115

P.V.M. 3 114

〇十六

(別紙第十二號)

六月廿三日外務大臣ヨリ在馬關浪速艦加藤外務書記官ヘ左ノ電報ヲ發セリ

左記ノ暗號電信ヲ大鳥ヘ渡セ且ツ本電ニ接シタラハ返電セヨ

「朝鮮ノ行政司法及財政ノ制度上實際有効ノ改革改善ヲ施シ以テ將來再
ヒ失政ナカラントヲ保證スヘキコトヲ同政府ニ向ヒ勸告振テ以テ嚴談ス
ヘキ旨閣下ニ訓令ス其際閣下ノ論鋒ヲ強ムルニハ本大臣カ清國公使ヘ
與ヘタル回答中ニ述ヘタル理由ヲ用フヘシ右回答ノ寫ハ加藤ヨリ閣下
ニ傳達スヘシ而シテ閣下ハ適宜ニ右理由ヲ諸外國公使ニ開示シ以テ日
本政府ノ處置ノ至當ナルコトヲ世上ニ表スヘシ」

P.V.M. 3 116

〇十七

REEL No. 1-0049

0110

(別紙第十三號)

○朝鮮國內政改良ノ件ニ付大島公使へ訓令

機密送第二六號

本大臣ハ茲ニ廟議決定ノ旨ニ遵ヒ左ノ訓令ニ及ヒ候間閣下ニハ此際朝鮮政
府ニ向テ左記ノ通提議相成尙ホ同時ニ之ヲ公文ニ認メ該政府ニ照會シ其公
文ノ回答ヲ取附被置候様可被成候

曩キニ我帝國カ貴國トノ舊交ヲ尋キ鄰好ヲ修ムルヤ深ク東洋大局ニ顧
念スル所アリタルヲ以テ獨リ自ラ率先シテ條約ヲ訂結シテ平等ノ權利
ヲ確實ナラシメ章程ヲ設立シテ通商ノ便益ヲ皇張セシメ因テ以テ貴國
ノ一獨立國タルコトヲ萬國ニ彰表セリ爾來我政府カ貴國ニ向テ施爲ス
ルトコロトシテ貴國ヲシテ日々ニ隆盛ヲ致シテ以テ愈々獨立自主ノ實
ヲ舉ケシメント勉メタルニ非サルハナシ而シテ苟モ貴國政府ニシテ内
ニ自ラ追思回顧セラレタランニハ必ス歷々トシテ其事實ヲ識認セラレ
スンハアラス然ルニ貴國徒ラニ舊章ヲ墨守シ宿弊未タ除カス是ヲ以テ
擾乱相繼キ民心乖離シ國家ノ秩序ヲ紊乱シ邦土ノ安寧ヲ危殆ナラシメ

屢累ヲ鄰邦ニ及ホス若シ今ニ方テ之カ救濟ノ道ヲ講シ振作ノ計ヲ爲サ
レスンハ其極遂ニ取捨スヘカラサルノ勢トナリ獨リ自國獨立ノ根基ヲ
寬鬆ニスルノミナラス延テ大憂ヲ東洋大局ニ及ホスコトアルニ至ルヘ
シ是レ我國カ鄰邦ノ情誼ニ於テ又我帝國自衛ノ道ヲ顧ミルニ於テ一日
タモ拱手傍觀スルニ忍ヒサル所ナリ故ニ我政府ハ此際貴國政府ニ向テ
獨立自主ノ實ヲ舉ケ王室ノ尊榮ヲ永遠ニ維持スル長計ヲ求ムルノ外更
ニ左ニ列載スルトコロノ事項ヲ勸告シ以テ貴國內治ノ改良ヲ促サント
ス

- 一 官司ノ職守ヲ明カニシ地方官吏ノ情弊ヲ矯正スル事
- 一 外國交渉ノ事宜ヲ重シ職守其人ヲ擇フ事
- 一 裁判ヲ公正ニスル事
- 一 會計出納ヲ嚴正ニスル事
- 一 兵制ヲ改良シ及警察ノ制ヲ設クル事
- 一 幣制ヲ改定スル事
- 一 交通ノ便ヲ起ス事

以上列載ノ事項ヲ閣下ヨリ勸告セラル、節ニハ各項ニ付左記ノ理由ヲ臚陳シテ以テ其改良ノ實ニ己ムヲ得サル所以及其一日モ忽カセニスヘカラサル所以ヲ辨明セラルヘシ即チ

官司ノ職守云々ノ項ニ付テハ

朝鮮國情弊ノ多キ因循ノ久シキ政令横ニ出テ官紀序ヲ失ヒ衙署有司ノ設アリト雖モ徒ラニ其職ニ充テ其缺ヲ補ハシムルノミ此ノ如クニシテ安ソ能ク吏治ヲ整頓スルコトヲ得ンヤ故ニ宜シク此時ニ當リテ各其分掌ノ事務ヲ明カニシ以テ其責守ヲ曠カラシメサルコトヲ期セサルヘカラス

外國交渉ノ事宜云々ノ項ニ付テハ

之ヲ從來ノ經驗ニ徵スルニ彼我交渉事件ノ起ルニ際シ權關ノ橫議ハ常ニ當局者ノ談ヲ左右シ朝ニハ之ヲ是トスルモ夕ニハ之ヲ非トシ昨ハ之ヲ諾スルモ今ハ之ヲ肯セス泛々茫々強ヒテ其言質ヲ捉ヘテ之ニ迫ルコトアルトキハ忽チ當局者ノ辭職轉任トナリ竟ニ外國使臣ヲシテ該國政府定見ノ在ルトコロヲ知ルニ迷ヒ隨テ信ヲ當局者ノ言語ニ措クコト能

ハサラシムルニ至ル故ニ向後ハ宜ク外務當局者ノ職守ヲ重クシ其一言一語ハ常ニ該國政府ヲ代表スルモノタルコトヲ明確ニセサルヘカラス
裁判云々ノ項ニ付テハ

該國現在ノ裁判制度ニ依ルトキハ地方長官ニ於テ訟件ヲ受理シ其判決ヲ以テ終審トナシ更ニ控訴上告ノ道ナク動モスレハ理非曲直其處ヲ失シ往々冤枉ニ屈シ更ニ補伸ノ道ヲ得サルヨリ延テ外交上事端ヲ滋スニ至ル故ニ宜ク訟廷ヲ公開シ務メテ審理ノ公平ヲ期スヘシ且ツ成ルヘクハ此際裁判制度ヲ設備シ裁判官ヲ常置シ裁判所ノ階級ヲ劃定シ以テ控訴上告ノ道ヲ開通スルヲ可トス

會計出納云々ノ一項ニ付テハ

貢租賦稅ノ實額ヲ調査シ國庫ノ歲出入ヲ明カニシ貪官汚吏ヲシテ其侵蝕ヲ恣ニスルコトヲ得サラシムヘシ

兵制警察云々ノ一項ニ付テハ

必要ノ兵備ヲ設ケテ以テ國安ヲ保持スルハ獨立國當然ノ措置ニ屬スレハ宜ク精銳ヲ訓練シテ以テ護國ノ實ヲ舉クヘク又常ニ國內ノ公安秩序

ヲ維持シ擾乱ヲ未發ニ防カントスルニハ宜ク警察ノ制ヲ設テ以テ機ヲ察シ微ヲ識ルコトヲ期スヘシ

幣制云々ノ項ニ付テハ

目下該國ノ通貨ハ濫鑄粗造國家ノ經濟ヲ紊リ貿易上ノ不便言フヘカラ
ス故ニ宜ク新ニ一定ノ幣制ヲ設テ通貨ヲ鑄造シ益貿易ノ便ヲ謀ルヘシ
交通云々ノ項ニ付テハ

元山、仁川、釜山其他要地ヘノ電信線ヲ新造又ハ改造シ釜山、京城其他ノ地
ニ鐵道ヲ布設シ又成ルヘクハ郵政ヲ全國ニ布キ其他往來交通ノ便ヲ増
スコトヲ謀ルヘシ

右及訓令候敬具

明治二十七年六月二十八日

外務大臣 陸奥宗光

在京城

特命全權公使大島圭介殿

P.V.M. 3

121

(別紙第十四號)

○清國人民カ朝鮮ニ於テ特有スルトコロノ利益ニハ帝國臣民モ均霑ノ件ニ付大鳥公使へ訓令

機密送第二七號

閣下ニハ別信訓令中ニ列載セシ朝鮮國內治ノ改良ニ關スル事項ヲ該國政府ニ勸告セラル、ト同時ニ帝國ノ利益ニ關シ左ノ事項ヲ要求相成候様致度候即チ

從來清國人民カ該國ニ於テ他ノ各國人民ニ比シテ特有スルトコロノ一切ノ利益ニハ帝國臣民モ之ニ均霑スル事

假令ハ仁川港ノ埋立工事ノ如キ其他兩國政府間ニ現ニ尙ホ懸延スルトコロノ事項ヲ急速處辨セシムヘキ事

又該國ヲシテ益文明ノ域ニ赴カシムルニハ廣ク智識ヲ開キ益新鮮ナル元素ヲ注入スルニ如クハナシ而シテ此等新鮮ナル元素ヲ注入スルニハ少年子弟ヲシテ廣ク外國ノ事情ニ通曉シ字内ノ形勢ヲ熟知セシメ兼テ專科ノ學術ヲ講習セシムルヲ以テ第一ノ良策ト相信候ニ付テハ此際同國門閥俊秀ヲ選拔

シテ外國ニ留學セシムルコトヲ御勸告相成度又御談話ノ都合ニテ如シ好機會有之候ハ、閣下ノ御考トシテ此際特赦ヲ行ハシムルコトヲ被勸試度御承知ノ道該國ニテハ朋黨比類互ニ相争鬪スルノ弊ヨリシテ睥睨相屬シ動モスレハ一巳ノ私怨ヲ晴サンカ爲メ恣ニ罪ヲ構ヘ人ヲ陥ル、ノ風誠ニ少ナカラス是レ實ニ文明國ニ有間敷惡風ト謂フヘシ故ニ此際特赦ノ典ヲ行ヒ國事ノ爲メニ罪ヲ負フ者ヲ赦免シ政府ノ宏量ヲ示シ以テ人心ヲ取攬スルコトヲ務ムルハ同政府ノ爲メ得策ト存シ候

右申進候敬具

明治二十七年六月二十八日

外務大臣陸奥宗光

在京城
特命全權公使大鳥圭介殿

(別紙第十五號)

○朝鮮屬邦説ヲ排斥シ並ニ内政改革斷行手續ニ付大島公使ヨリ上申
機密第百十號本六五

昨二十七日加藤書記官着仁本日午前入京候ニ付委曲御訓令ノ趣致承知並ニ
是迄貴我ノ電信ニテハ意味充分ニ相通セサリシ廉ヲモ判明致候扱當地ノ形
勢ハ追々電信及機密信等ニテ申進候通り當政府一般ノ希望ハ只管無事平穩
ヲ願ヒ日夜日清兩兵ノ撤回ヲ僥倖シ而シテ其目的ヲ達スル手段トシテ初メ
ハ專ラ袁世凱ニ依頼シタルモ急速ノ結果ヲ見サルニ付更ニ轉シテ各國公使
ニ周旋ヲ依頼シ或ハ電信ニテ李鴻章ニ依頼スル等可及丈ノ手段ヲ盡シ居ル
ヤニ被推察候又袁世凱ハ此際頻リニ大言ヲ放チ或ハ偽造電信ヲ送リテ韓廷
官吏ヲ恐嚇シ日本政府今回ノ舉ハ全ク朝鮮ヲ併呑セントノ野心ヲ包藏スル
トカ又ハ内治干涉ノ端緒ヲ開カント欲スルニ在ルトカ自分勝手ノ理窟ヲ製
造シ韓官ニ説込ムカ爲メ左ナキタニ日本ヲ嫌惡シテ支那ニ依頼心深キ韓廷
ノ老人連ハ徹頭徹尾支那ニハ離ル可カラヌ縱令日兵ハ一時多數ナルモ最後
ノ勝利者ハ必ス支那ナラント確信シ其他稍時世ニ通シタル者ト雖モ姑ラク

P.V.M. 5 124

兩端ヲ觀望シ其勝敗ヲ見テ去就ヲ決セントスル様子ナレハ所謂日本黨ト稱
セラレテ或ハ陽ニ或ハ陰ニ運動スル者ハ目下勢力ナキ金嘉鎮、愈吉濬、趙義淵
安駟壽等十餘人ニ相過キ不申候斯カル有様ナレハ此際是非トモ支那ト一衝
突ヲ興シ之ヲ打破リタル後ニアラサル以上ハ内政改革ノ目的充分貫徹スル
ヲ得サルヘシト思考致候得トモ日清兩兵ノ衝突ハ容易ニ招キ難ク因テ内政
改革ヲ先キニシ若シ之カ爲メ日清ノ衝突ヲ促サハ僥倖ナリト切リニ謁見ヲ
促シ候處去ル二十六日午後三時國王殿下ニハ本官ヲ引見セラル可キ旨内務
督辦ヨリ通知有之候ニ付此機會ニ投シテ内政改革ノ端緒ヲ相開キ追テ加藤
書記官ノ來着ヲ待テ改革案ヲ政府ニ提出ス可クト存シ別紙甲號寫ノ通り内
治改良ノ必要ヲ述ヘ且ツ委員ヲ定メテ本使ト協議相成候様致度旨殿下ノ前
ニ言上ニ及ヒ同時ニ上奏文即チ別紙甲號奉呈致置候就テハ改革案調成次第
外務督辦又ハ殿下ヨリ特命セラレタル改革取調委員ニ提出シテ協議ニ及ヒ
可申ト存候尤モ先頃ヨリ内々改革派ヲモ教唆致シ我ハ外ヨリ追ルト同時ニ
内ニ興リテ改革ヲ促ス可キ手筈ニ致置候得共前陳ノ通り改革派ノ勢力甚々
微弱ナレハ彼等果シテ能ク内應ノ功ヲ奏スルヤ否甚々覺束ナク被考候萬一

P.V.M. 5 125

我ヨリ改革案提出ノ際彼ハ清使ノ後援ヲ頼ミ拒絶シテ受ケサルカ若クハ陽
ニ之ニ應シテ其實行ヲ躊躇スルカ如キ場合アル時ハ本官ハ條理ノ許ス限リ
ハ手荒キ手段ヲ用ユルトモ必行ニ至ラセ申度考ニ有之候間左様御承相成
度候將又清國政府ノ舉動ハ或ハ硬或ハ軟甚々曖昧ニシテ判然致シ不申去ル
二十二日出發ノ清兵五百名程ハ同日牙山ニ到着致候得共右ハ補充ノ
爲メ派送セラレタル趣ニテ其餘ノ兵隊ハ出發準備ノ報告ニ接シタル迄ニテ
未タ渡韓ノ實否相分リ不申候又同國兵入京ノ説モ全ク相止ミ申候左レハ清
國政府ハ我ト干戈相見ルノ非策ナルヲ悟リ平和手段ヲ以テ兩兵撤退ノ功ヲ
奏セント盡力致居ルニアラサルヤト被推測候尤モ去ル二十三日及二十五日
ノ兩日ニ袁世凱ヨリ別紙乙丙號ノ如キ書面ヲ送り目下全羅道ニ於ケル民乱
ハ既ニ平定シタリト報告スレトモ巨魁及餘黨ノ行衛詳ナラサル程ナレハ未
タ充分ニ平定シタルモノト見做シ難シ右ハ他國ノ爲メ兵ヲ駐ムル口實ヲ與
フルモノニ付清韓共ニ兵ヲ派シテ剿討ノ實功ヲ奏ス可シト相迫リ候處朝鮮
政府ニテハ其返答ニ當惑シ只泣付クカ如ク切リニ袁氏ニ向テ出兵中止ノ事
ヲ依頼致居ルヤニ及漏聞候前陳ノ通り日清兩國兵ハ各二十餘里ヲ隔テタル

P.V.M. 3 126

遠地ニ駐屯シ而シテ其目的モ一ナラサレハ幾日ヲ經過ストモ兩兵相衝突ス
可キ機會無之然ルニ我兵ハ追々増加シテ彼ニ二三倍シタレハ我利ハ速戰ニ
在ルコト勿論ナルノミナラス内治改革ノ目的ヲ達スルニ於テモ亦速戰ヲ利
益トス可キニ付去二十六日第十一號ヲ以テ其趣電稟ニ及ヒタル次第ニ有之
候然ル處本日加藤書記官來着貴大臣閣下ノ御趣意モ充分致了解候ニ付前緒
ヲ追ヒ問題ヲ獨立屬邦ト内政改革ノ二種ニ區別シ左ノ順序ニ從テ之ヲ決行
可致ト存候

(甲) 獨立屬邦ノ問題

第一着 本月六日東京駐在清國公使ヨリ貴大臣閣下へ送呈シタル公文寫ヲ
朝鮮政府ニ送り同政府ハ保護屬邦ノ四字ヲ認ムルヤ否ヲ慥ムルコト(但
シ是ハ本日別紙丁號ノ通り照會ヲ遂ケタリ)
第二着 朝鮮政府ハ若シ我國ハ自主獨立ニシテ清國ノ屬邦ニアラスト返答
シタル時ハ我ハ朝鮮政府ニ向テハ今清兵ハ保護屬邦ト稱シテ貴境ニ入
リシハ是レ貴國ノ獨立權ヲ侵害セリ之ヲ退去セシメテ日朝條約ノ明文
ヲ全スルハ貴政府ノ義務ナレハ早ク之ヲ逐出ス可シ若シ貴國政府ノ力

P.V.M. 3 127

ニテ之ヲ能セサルトキハ我兵力ヲ以テ貴國ヲ助ケ之レテ逐拂フヘシト相迫リ清國公使ニ向テハ貴國ハ保護屬邦ヲ名義トシテ朝鮮ニ派兵セラレタルコトハ我政府ノ飽迄不同意ヲ唱フル所ナリ我政府ハ初メヨリ朝鮮ノ獨立ヲ認メタレハ其獨立ヲ保護スル義務アリ且ツ朝鮮政府モ亦貴國ノ屬邦ニアラサル旨ヲ明言セリ左スレハ貴國ノ兵ハ不正ノ名義ヲ以テ派來シタルモノニ付速ニ引拂ハルヘシ若シ躊躇セララルニ於テハ餘義ナク我兵力ヲ以テ之ヲ引拂ハシム可キ旨通知ス可シ

又若シ朝鮮政府ハ清國ノ屬邦ニ相違ナキ旨返答シタル時ハ我ハ一應督辦ニ面會シテ其利害ヲ説明シテ公文ヲ撤回セシムヘシ彼若シ我説ニ服セサルトキハ公然朝鮮政府ニ向テ彼カ修好條規第一款ニ背キ且ツ訂約已來十七年間我ヲ欺キタル罪ヲ責メ兵力ヲ以テ之ニ迫リ彼ヲシテ謝罪ノ實ヲ舉ケシメ我ニ満足ナル補償ヲ取ルヘシ
又若シ朝鮮政府ハ我國ハ古來清國ノ屬邦ト稱セラル、モ内治外交ハ自主ニ任スル約束ナレハ自主ノ邦國タルニ相違ナシト返答シタル時ハ我ハ朝鮮政府ニ向テ内亂ヲ鎮定スルハ内治ニ屬セリ然ルニ清國ハ保護屬

邦ノ名義ヲ借リテ其兵ヲ前派シタルモノハ是レ内治ニ干涉スルナリ屬邦ノ實ヲ舉ケントスルモノナリト云フ理由ヲ執リ其他ハ第一項ノ手續ニ從テ韓廷及清使ニ迫ルヘシ

(乙) 内政改革ノ問題

第一着 國王ニ奏上スルコト(去二十六日既ニ奏上ヲ遂ケタリ)

第二着 改革案ヲ政府ニ提出シ政府ハ我勸告ヲ容レテ改革ヲ實行スルヤ否
決答ヲ促ス可シ

第三着 朝鮮政府若シ勸告ニ應セサルトキハ條理ノ許ス限リハ恐嚇手段ヲ執リ其實行ヲ促ス可シ

右甲乙兩問題ヲ決行スルカ爲メ本官ハ前陳ノ手續ニ依ルヘキ考察ニ有之候得共實行ノ際ニハ充分注意相加ヘ可申又當地駐在ノ各使臣ヘモ豫メ我趣意ヲ表明シテ異論ヲ招カサル様ニ取計可申ト存候且ツ本件ニ付電信不通ノ爲メ明日特ニ八重山艦ニテ二口翻譯官補ヲ佐世保ニ派シ電稟ニ及ヒ候得共猶ホ爲念茲ニ委細及具申候也

明治二十七年六月二十八日

特命全權公使大島圭介



外務大臣陸奥宗光殿

追テ當地ノ形勢ハ漸ク危險ニ相逼リ候ニ付居留民老幼婦ヲハ仁川又ハ本邦へ避難セシム可キ考ニ有之候

(別紙甲號)

使臣大鳥圭介謹

奏恭惟

大君主陛下

聖德日躋兆民沐化

鄧治彌隆。寰宇獻頌。無任欽仰之至。竊嘗南民蠢爾梗化。敢抗有司。跳梁一時

王師爰發。大張撻伐。復慮滅此朝食之不易。竟有借鄰援之舉。我

政府有聞於此。以為事体較重。乃奉

天皇陛下諭旨。令使臣帶領兵員回任

闕下。自衛使館商民併念

貴國休戚所繫。如有所求。兼可一臂相助。以盡敦隣友誼。使臣銜

命抵京也。適聞完城克復。餘黨竄退。於是班師善後。漸將就緒。此莫非盛德所被。實為內外所共慶頌也。顧我

日本國與

貴國共處東洋一方。疆域逼近。詢不翅輔車唇齒。况講信修睦。使弊往來。今昔不渝。徵之史冊。歷然可稽。方今觀列國眾邦之大勢。政治。教民。立法。理財。勸農。獎商。無非富強自致。逞長專能。而欲雄視宇內耳。然則泥守成法。不思逆變達權。廣開眼界。不力爭勢自主。何能相持。介立乎列邦環視之間耶。是以又命使臣以會同

貴朝廷大臣。講明此道。相勸

貴政府務舉富強實政。則休戚相關之誼。於是乎可始終。輔車相依之局。於是乎可

保持矣。伏望

陛下聖鑒。降

旨。飭令辦理交涉大臣。或專委大臣。會同使臣。俾盡其說。庶幾無負我政府篤念鄰誼至意。則大局幸甚。使臣圭介不勝仰望屏息之至。爰祈

陛下洪福無疆。謹

奏

(別紙乙號)

○陰五月二十日(我六月十三日)袁世凱ヨリ統署ヲ經テ議政府ハノ照會

敬密啓者。今夜奉總理衙門北洋大臣電開。韓自全城收復。敗匪若干。究竟何往。迄無的信。韓轉置剿賊正事於不計。而首要不獲。餘匪去向不知。以擾及兩道之賊眾。一旦杳無踪跡。誰實信之無惑。他國有所藉口。宜飭袁道催韓趕速進剿。並飭葉聶相機助剿。必真肅清。乃可報賊平也。等因。奉此。除轉電葉軍門。聶鎮台。遵照酌辦。並隨時面催往來各官外。特請

貴政府迅飭進兵。前往剿捕。必須真實肅清。始可報稱匪平。以抒中朝之憂顧。而杜他人之藉口。是所盼切。專此布頌

助祺。維希

電照。不既。

(右ニ付探報スル所ニ據レハ議政府ハ賊匪己ニ平定シタルニ付清國援軍ノ進撃ヲ願ハサル旨ヲ以テ回答シタリト云フ)

P.V.M. 3 132

(別紙丙號)

○五月二十日(我六月廿五日)袁世凱ヨリ朝鮮政府ニ送リタル機密書

敬密啓者。頃接葉大師電開。頃接史亟探報。沿道地方官與雲史亟意見均合。准全羅道今聞雲前往古阜一帶。百計阻攔。不慮匪而慮倭。並言匪已散盡。其中顯有情弊等語。地方官既不協。又無嚮導。良莠不齊。勦撫從措。手所兄轉達韓廷。迅飭辦理。并催韓進勦云。准此。應即備函請煩貴政府速飭各官。前往進剿。以期一律肅清。免留餘孽。致復萌起。并飭該道地方官。過有我處探軍。安派嚮導。勿更延阻。爲要。專此密布。敬頌助安。維祈電照。不既

袁

(別紙丁號)

○大鳥公使ヨリ趙督辦ヘ送リタル書翰

第五十九號

以書東致啓上。候陳者。今般本國外務大臣ノ訓令ヲ奉シタルニ。我曆本年六月七日。東京駐在清國欽差出使汪氏ノ照會ニ。接到候處。其中且派兵援助。乃我朝保護屬邦舊例等語。有之。然ルニ我國政府ハ初メヨリ朝鮮ヲ認メテ自主獨立ノ邦國

P.V.M. 3 133

ト爲シ現ニ明治九年二月二十六日訂結兩國修好條規第一款ニモ朝鮮國ハ自
主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ保有ストノ文字明載有之候處該清國欽差
ノ照會ハ全ク之ニ反對シ實ニ意外ノ儀ト存候右ハ日朝兩國ノ交際ニ對シ至
大ノ關係ヲ及ス義ニ付朝鮮政府ニ於テモ自ラ保護屬邦ノ四字ヲ相認メ候儀
ニ有之候哉至急貴國政府ニ向テ御意見ヲ相慥メ可申トノ儀ニ有之候依テ該
清國欽差ノ照會寫相添茲ニ及御照會候間明日即我曆本月二十九日ヲ限リ該
分ノ御回答相成候様致度此段及御照會候敬具

明治二十七年六月二十八日

特命全權公使大島圭介

督辦交涉通商事務趙秉稷閣下

〇二七七

P.V.M. 3 134

REEL No. 1-0049



(別紙第十六號) (大島公使ヨリノ來翰廿七年七月九日付)
機密第一二二號本七〇附屬甲號

貴國內政改革ノ今日ニ必要ナル所以并我政府ハ其位地及友誼上ノ關係ヨリ
之ヲ貴政府ニ勸告セサル可カラサル所以ノ理由ハ先般本公使ハ 貴國大君
主陛下ニ進見シタル際具サニ御前ニ陳奏シタリト雖モ本日內政改革案ヲ提
出スルニ當リテ改メテ貴政府ニ向ヒ其理由ヲ詳陳セサル可カラス抑貴國ハ
最近十餘年ノ經驗ニ於テ兵變民乱屢興リ國內平穩ナラス其餘響施テ隣國ニ
及ヒ或ハ竟ニ外國兵ヲ招來スルノ不幸ヲ見ルハ貴我兩國ノ共ニ憂フル所ナ
リ必竟スルニ貴國ハ其獨立ヲ維持スル原素就中國内ノ安寧ヲ維持スル兵備
ニ缺乏セル所アリテ其勢此ニ至ルモノト判定セサルヲ得ス我帝國ハ貴國ト
一葦帶水ヲ隔テ、相隣接シ隨テ政事及貿易上ノ關係淺カラザレハ貴國ニ於
ケル變乱ハ我帝國ノ利益ニ影響スル實ニ鮮少ナラス左スレハ我帝國ハ今日
貴國ノ困難ナル状態ヲ觀ナカラ其儘ニ看過ス可カラサルハ勿論ノ事ナリ何
トナレハ則チ我帝國ハ此際貴國ノ困難ヲ秦越視スルハ啻ニ年來ノ友誼ニ背
クノミナラス之カ爲メ我帝國ノ安寧ヲ害シ利益ヲ損センコトヲ恐ルレハナ
リ是ヲ以テ嚮キニ帝國政府ハ東京ニ於テ貴國善後方案若干條ヲ畫策シ之ヲ

P.V.M. 135

我國ト畧同様ノ位地ニ立テル清國欽差大臣ニ提議シ同政府ノ協同ヲ相求メ
タリシニ同政府ハ敢テ之ニ應セス冷淡ニモ我協議ヲ斥ケタリ然リト雖モ我
政府ハ輒ク當初ノ目的ヲ變スルモノニアラス飽迄其趣意ヲ追ヒ貴國ニ勸メ
テ獨立國ニ適當ナル政治ヲ確立セシメント欲ス依テ茲ニ本公使ニ訓令シテ
改革方案五條ヲ提出セシム 貴政府諸公廣ク宇内ノ形勢ヲ觀國家百年ノ長
計ヲ慮リ以テ我政府ノ好意ヲ空フスル無カラシコト深ク希望スル所ナリ

內政改革方案綱領

- 一 中央政府ノ制度并ニ地方制度ヲ改正シ并ニ人材ヲ採用スル事
 - 二 財政ヲ整理シ富源ヲ開發スル事
 - 三 法律ヲ整頓シ裁判法ヲ改正スル事
 - 四 國內ノ民乱ヲ鎮定シ安寧ヲ保持スルニ必要ナル兵備ヲ設クルコト
 - 五 教育ノ制度ヲ確立スル事
- 右ハ內政改革ノ大綱領ナリ其細目ニ至リテハ貴政府ニ於テ委員任命ノ後更
ニ本使ヨリ提議スル所アルヘシ依テ貴政府ハ第一着手トシテ 大君主陛下
ノ最モ信用セラル、大臣數名ヲ委員ニ任命セラレンコトヲ希望セリ

P.V.M. 136

(別紙第十七號)

○内政改革案提出ノ件ニ付大鳥公使ヨリノ上申

機密第一二一號本七〇

朝鮮政府ニ向ヒ内治改良勸告ノ儀ニ付去六月二十八日機密第二六號貴信ヲ以テ縷々御訓示有之候處同伴ニ付テハ其前既ニ再三ノ御電訓有之且ツ加藤書記官ヲ以テ御口達ノ訓令モ有之候ニ付本月三日(即チ機密第二六號貴信接到ノ二日前)別紙甲號ノ通り改革方案綱領五條ニ趣意説明ヲ添ヘ外務督辦ニ提出シテ大君主陛下ニ轉奏方依頼致候然ル處當政府ノ内部ニハ改革反對派ノ勢力頗ル熾ニシテ改革派ハ之ニ抵抗スル能ハス加之改革派ト雖モ去十七年金朴等ノ失敗ヲ鑒ミ進ンテ改革ヲ唱フルモノ無之ニ因リ果テハ滿朝反對ノ聲ト相化シタルカ如ク致傳聞候得共我勸告ニ向テモ亦彼等推切リテ之ヲ拒絕スル氣力無之ニ哉去七日朝内務督辦申正熙、同協辦金宗漢、曹寅承ノ三名ハ我勸告ニ從ヒ改革取調委員ヲ命セラレタル旨同夜外務督辦ヨリ官員ヲ派シテ通知有之候尤モ内政改革協議ニ付初メヨリ外務督辦ハ公然照會等ヲ用ユルコトナク内密ニ取計度旨申出候得共御訓示ノ次第モ有之候ニ付同七日

P.V.M. 3 137

ニ至リ遲延ナカラ別紙乙號ノ通り照會シ併テ委員ト會同センコトヲ相促シ置候處昨八日夜屬員ヲ派シ「公然照會セラレテハ迷惑ノ廉不少ニ付何卒撤回スル様ニ」ト依頼有之候得共斷然拒絕致置候猶ホ今日ニモ委員會同ノ期ニ立至リ候ハ、第一彼等ノ委任權限相慥メ果シテ我相談ニ應シテ改革實行ニ至ル可キ權限ヲ有シ居リ候ハ、別紙丙號ノ改革案ヲ以テ協議ニ及ヒ且ツ各案ノ緩急ヲ見計ヒ期限ヲ定メ必行相迫リ可申ト存候將又別紙丙號ノ改革綱目ハ機密第二六號貴信ニテ御訓示ノ條項トハ致相違候得共右ハ去三日提出ノ綱領ヲ追フテ取調候モノニ付今更之ヲ改ムル譯ニ至リ兼候尤モ御訓示ノ條項ヲハ一切其中ニ含蓋セシメ遺漏ナキ様ニ取計候別紙相添右及上申候也

明治二十七年七月九日
特命全權公使大鳥圭介

外務大臣陸奥宗光殿

P.V.M. 3 138

(別紙ノ内甲號ハ前出ニ付畧ス)



(別紙乙號)

第七十號

以書東致啓上候陳者我曆本年六月二十六日本公使カ貴國大君主陛下ニ進見シタル際貴國內政改革ノ今日ニ必要ナル所以并ニ我政府ハ其位地及友誼上ノ關係ヨリ之ヲ貴政府ニ勸告セサル可カラサル所以ノ理由ヲ御前ニ陳奏シ尋テ本月三日貴督辦ニ御面會ヲ遂ケ改革案一冊即チ別紙同文ヲ提出シテ大君主陛下ニ御代奏相成候様御依頼致置候然ルニ今日ニ至ル迄既ニ五日ヲ經タルモ貴政府ニハ採否孰レニ御決定相成リ候哉未タ何分ノ御回答ニ相接シ不申候抑我政府ハ今般貴政府ニ向ヒ內政改革ヲ御勸告及ヒ候次第ハ該案趣意書ニモ詳陳致置候通り東洋ノ大局ヲ保全セント願フ深慮ヨリ起見シ偏ニ貴政府ノ御採用アラコトヲ希望スル儀ナレハ唯一日モ速ニ御回答相待居リ候依テ前記提出案ニ對シ明日即チ我曆本月八日正午十二時マテニ何分ノ御確答相成候様致度此段照會得貴意候敬具

明治二十七年七月七日

特命全權公使大鳥圭介

督辦交涉通商事務趙秉稷閣下

P.V.M., 3 139

(別紙丙號)

○內政改革方案綱目

第一條 中央政府ノ制度及地方制度ヲ改正シ并ニ人材ヲ採用スルコト

一官守ノ職守ヲ明カニスルコト

内外庶政ヲ總理スル機務ハ舉ケテ之ヲ議政府ニ復舊シ六曹判書ヲシテ各其分職ヲ守ラシメ而シテ勢道執權ノ弊制ヲ廢止スルコト

内外政務ト官中事務ト判然區別ヲ立テ官中ニ奉仕スル官吏ヲシテ一切政務ニ干渉セシメサルコト

一外國交渉ノ事宜ヲ重シシ國家ニ代リ其責ニ任スル大臣ヲシテ之ヲ主宰セシム可キコト

一政事ヲ施行スルニ必要ナル官衙ヲ存立シ其餘ハ總テ之ヲ廢止シ又ハ甲官衙ノ事務ヲ乙官衙ニ合併シ以テ簡便ニ從フコト

一現在ノ府郡縣治ハ其數過多ナレハ宜ク酌量シテ之ヲ廢合シ民治ニ妨ナキ迄ノ少數ニ止ムルコト

P.V.M. 3 140

一 事務執行ニ必要ナル官吏員ヲ存シ其餘ノ冗員ハ之ヲ沙汰スル
コト

一 従前ノ格式ヲ打破シテ廣ク人材ヲ登用スル門ヲ開クコト

一 賣官ノ惡弊ヲ停廢スルコト

一 時勢ヲ參酌シテ官吏ノ俸給ヲ定メ生ヲ資テ廉ヲ養フニ差支ナ
カラシムルコト

一 官吏取賄索錢ノ惡習ヲ嚴禁スルコト

一 地方官吏ノ情弊ヲ矯正スル法ヲ設クルコト

一 財政ヲ整理シ富源ヲ開發スルコト

第二條

一 國家ノ收入及支出ヲ調査シ其制定ヲ立ツルコト

一 會計出納ヲ嚴正ニスルコト

一 貨幣制度ヲ改定スルコト

一 各道ノ田畝ヲ精査シ租稅ヲ改正スルコト

一 其他ノ諸稅法ヲ改正シ若クハ新稅ヲ設クルコト

一 不必要ノ支出ヲ減省シ并ニ收入増加ノ方法ヲ講スルコト

一 國道通衢ヲ推廣修平シ并ニ京城ト要港トノ間鐵道ヲ建築シ并
ニ全國重要ノ城市ニ通スル電信ヲ架設シ以テ通信往來ノ便ヲ
開クコト

一 各開港場ニアル稅關ハ一ニ朝鮮政府自ラ之ヲ管理シ他國ノ干
預ヲ容レサルコト

第三條

一 法律ヲ整頓シ裁判法ヲ改正スルコト

一 舊法中時宜ニ適セサルモノハ概テ之ヲ廢革シ或ハ新法ヲ制定
スルコト

一 裁判法ヲ改正シテ司法ノ公正ヲ明カニスルコト

第四條

一 國內ノ民亂ヲ鎮定シ安寧ヲ保持スルニ必要ナル兵備及警察ヲ設ク
ルコト

一 士官ヲ養成スルコト

一 舊式水陸兵ハ一切之ヲ廢シ更ニ財力ノ許ス所ヲ量リ新式兵ヲ
増置スルコト

一 京城及各城邑ニ嚴正ナル警察ヲ設クルコト



第五條 教育ノ制度ヲ確定スルコト

- 一時勢ヲ斟酌シテ學制ヲ新定シ各地方ニ小學校ヲ設立シ子弟ヲ教育スルコト
 - 一 小學校ノ設立準備スルヲ待テ漸次中學及大學ヲ設立スルコト
 - 一 學生中俊秀ナル者ヲ撰拔シテ外國ニ留學セシムルコト
- 右各項ノ内左ノ事項ハ十日内決行ス可キモノトス

一 内外庶政ヲ總理スル機務ハ舉ケテ之ヲ議政府ニ復舊シ六曹判書ヲシテ各其分職ヲ守ラシメ而シテ世道執權ノ弊制ヲ廢止スルコト

一 内外政務ト官中事務ト判然區別ヲ立テ官中ニ奉仕スル官吏ヲシテ一切政務ニ干渉セシメサルコト

一 外國交渉ノ事宜ヲ重シシ國家ニ代リ其責ニ任スル大臣ヲシテ之ヲ主宰セシム可キコト

一 従前ノ格式ヲ打破シテ廣ク人材ヲ登用スル門ヲ開クコト

一 賣官ノ惡弊ヲ停廢スルコト

一 官吏取賄索錢ノ惡習ヲ嚴禁スルコト

一 京城ト要港トノ間ニ鐵道ヲ建築シ并ニ全國重要ノ城市ニ通スル堅牢ナル電信ヲ架設シ以テ通信往來ノ便ヲ開クコト

但シ末項鐵道電信ノ二工事ハ十日内ニ起工ノ決議ヲ爲シ準備出來次第其工ヲ起スモノトス

左ノ事項ハ六箇月内ニ決行ス可キモノトス

一 政事ヲ施行スルニ必要ナル官衙ヲ存立シ其餘ハ總テ之ヲ廢止

シ又ハ甲官衙ノ事務ヲ乙官衙ニ合併シ以テ簡便ニ從フコト

一 現在ノ府郡縣ヲ廢合シ民治ニ妨ナキ迄ノ少數ニ止ムルコト

一 事務執行ニ必要ナル官員ヲ存シ其餘ノ冗員ハ之ヲ沙汰スルコト

ト

一 時宜ヲ參酌シテ官吏ノ俸給ヲ定メ生ヲ資テ廉ヲ養フニ差支ナカラシムルコト

一 地方官吏ノ情弊ヲ矯正スル法ヲ設クルコト

一 國家ノ收入及支出ヲ調査シ其制度ヲ立ツルコト

- 一 會計出納ヲ嚴正ニスルコト
- 一 貨幣制度ヲ改定スルコト
- 一 不必要ノ支出ヲ減省シ并ニ收入増加ノ方法ヲ講スルコト
- 一 各開港場ニアル税關ハ一ニ朝鮮政府自カラ之ヲ管理シ他國ノ干預ヲ容レサルコト

左ノ事項ハ二箇年内ニ決行スヘキモノトス

- 一 各道ノ田畝ヲ精査シ租稅ヲ改正スルコト
- 一 其他ノ諸稅ヲ改正シ若クハ新稅ヲ設クルコト
- 一 官道通衢ハ須ラク修平推廣スヘキコト
- 一 舊法中時宜ニ適セサルモノハ概子之ヲ廢革シ或ハ時宜ヲ參酌シテ新法ヲ制定スルコト
- 一 裁判法ヲ改正シテ司法ノ公正ヲ明カニスルコト
- 一 士官ヲ養成スルコト
- 一 舊式水陸兵ハ一切之ヲ廢シ更ニ財力ノ許ス所ヲ量リ新式兵ヲ増置スルコト

P.V.M. 3 145

- 一 京城及各城邑ニ嚴正ナル警察ヲ設クルコト
- 一 時勢ヲ斟酌シテ學制ヲ新定シ各地方ニ小學校ヲ設立シ子弟ヲ教育スルコト
- 一 學生中俊秀ナル者ヲ撰拔シテ外國ニ留學セシムルコト

P.V.M. 3 146

(別紙第十八號)

○朝鮮内政改革ノ勸告拒絕セラレタル時我カ執ルヘキ手段ニ付大島公使ヨリノ伺

機密第一二二號

朝鮮政府ニ向テ内政改革案提出ノ顛末ハ既ニ機密第一二一號信ニ詳陳致候
通リニ有之候處當政府ノ内情ヲ探偵スルニ國王ニハ大分改革ニ傾意セラ
ルト雖モ李鴻章ノ内意ヲ受ケタル電信天津ヨリ續達シ袁世凱又之ニ附和シ
テ恐嚇シ居ルカ爲メ守舊即チ事大派ノ氣焰ヲ一層強メタレハ彼等ハ我ニ向
テ外面改革ヲ口ニスルモ其實行ハ到底見込無之候彼等ノ胸算ハ一時我カ銳
鋒ヲ避ケ我勸告ニ應スルカ如キ顔色ヲ裝フテ時日ヲ送り其間ニ李鴻章及各
國公使ニ依頼シテ我駐在兵ヲ撤退セシメントノ考案ニ可有之ト被推察候就
テハ我ヨリ尋常手段ニテ之ニ當ルトキハ必然彼等ノ術中ニ陥リ可申掛念有
之候ニ付此際斷乎タル處置ニ出テ後害ヲ殘サ、ル様注意スルコトハ頗ル緊
要ノ義ト存候就テハ朝鮮政府ニ於テ斷然我勸告ヲ拒絕スルカ若クハ遷延シ
テ可否ノ決答ヲ爲サ、ルカ又ハ表面我勸告ヲ容レテ之ヲ實行セサル場合ニ

P.V.M. 3 147

於テハ總テ我勸告ヲ拒絕シタルモノト見做シ本官ハ左記兩案ノ内必ス其一
ヲ執リ直接又ハ間接ニ改革ノ必行ヲ促シ度ト存シ候

(甲)朝鮮政府ヨリ陽ニ或ハ陰ニ拒絕ヲ受ケタルトキハ我ヨリ「朝鮮政府ハ内
政不整頓ナルカ爲メ屢變亂ヲ挑發シ或ハ外援ヲ招クニ至リ實ニ我國ニ
向テ危險ヲ與ヘリ我國ハ政事及貿易上朝鮮トノ關係甚々深キカ故自衛
ノ爲メ朝鮮内政ノ改革ヲ促シ變亂ノ根源ヲ絶タサルヘカラス」ト云フコ
トヲ辭柄ト爲シ兵威ヲ以テ之ニ迫リ其必行ヲ促スヘシ但シ兵威ヲ以テ
之ニ迫ルノ手段ハ我護衛兵ヲ派シテ漢城ノ諸門ヲ堅メ且ツ王宮ノ諸門
ヲ守リ彼等カ承服スル迄手詰ノ談判ニ及フヘシ

(乙)朝鮮政府若シ陽ニ或ハ陰ニ我勸告ヲ拒絕シタルトキハ我ハ先ツ公文ヲ
以テ「朝鮮政府ノ拒絕ハ全ク東洋ノ大局ヲ顧ミス我國ト相提携シテ共ニ
富強ヲ圖ルニ意ナキヲ表示シタルモノナレハ我國ハ遺憾ナカラ本國ノ
利益ヲ保護スル手段ヲ執ラサルヘカラス」トノ決意ヲ申送り之ト同時ニ
左ノ要求ヲ爲スヘシ

P.V.M. 3 148

一日、朝鮮ハ自主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ保有ス」ノ主義ヲ



推擴シテ從來清韓間ニ有セシ宗屬ノ關係ヲ悉皆革除セシムルコト但シ
清韓間宗屬ノ問題ハ我ヨリ提出スヘカヲサル旨兼テ御電訓ニテ承知致
候ヘトモ朝鮮ニ向テ之ヲ提出スルハ強テ差支有之間敷ト存候

二最惠國條款ニ依リテ支那政府及人民ニ許與シタル權利特典(就中朝鮮國內ニ
於テ朝鮮人民ヲ
裁別スル權利
并電線架設等)ヲ我ニ要求スルコト

右二箇條ノ實行ヲ保証スル迄我カ兵ヲ派シテ漢城并ニ王宮諸門ヲ守ル
ヘシ

但シ兩國交渉事件ノ未決ニ屬スルモノハ通常談判トシテ別ニ提出スル
ヲ可トス何トナレハ此際提出スルモノハ強迫ノ材料ニ供スル迄ナレハ
若シ朝鮮政府カ顧テ改革ノ妥行スルトキハ必スシモ提出ニ及ハサルモ
ノナレハナリ

已上甲乙兩案トモ聊カ例外ニ在リト雖モ此際斯ル例外ノ處斷ニ出テサルト
キハ好結果ヲ収ムヘキ見込無之候尤モ其内甲案ハ改革ノ目的ヲ貫徹スル方
ニ取リテハ都合善シト雖モ餘リ例外ニ奔馳シタリトノ議責ヲ免レサルヘク
乙案ハ我ニ一應ノ口實アリト雖モ要スルニ改革ノ目的ト相齟齬スルヲ以テ

我舉動ハ始修相貫徹セサル嫌有之候乍去是亦改革ヲ力迫スル一手段ニ過キ
サレハ寧ロ議責ノ輕キ乙案ニ從フ方可然ヤト考俟右ハ目前ニ差迫リ候事件
ニ付本信御落手次第何分ノ御電訓有之候様致度此段至急伺出候也

明治二十七年七月十日

特命全權公使大島圭介

外務大臣陸奥宗光殿



(別紙第十九號)

七月十二日外務大臣ヨリ大鳥公使へ左ノ電報ヲ發セリ

北京ニ於ケル英國ノ仲裁失敗シタルヨリ今ハ斷然タル處置ヲ施スノ必要アリ故ニ閣下ハ克ク注意シテ世上ノ批難ヲ來サ、ル或ル口實ヲ擇ヒ之ヲ以テ實際運動ヲ始ムヘシ

三十四

P.V.M. 3 151

三十七

(別紙第二十號)

七月十二日外務大臣ヨリ大鳥公使へ左ノ電報ヲ發セリ

貴電第二十三號接受ス閣下ハ改革ニ對スル要求ヲ貫徹セシメシコトヲ務ムルト同時ニ京城釜山間ノ鐵道及電線木浦開港等ノ如キ實利ヲ占ムルコトニ盡力スヘシ本野福島ハ七月十三日午後九時四十五分京城へ向ケ出發スヘシ

P.V.M. 3 152

(別紙第二十一號)

○内政改革協議ノ爲メ朝鮮政府ヨリ撰定サレタル三名ノ委員ト會同ノ件ニ付大鳥公使ヨリノ上申

機密第一二七號七三

當國內政改革ニ付我勸告ノ照會ニ應シ當政府ニ於テハ内務督辦中正濶同協辦金宗漢曹寅承ノ三名選定セラレタル旨外務督辦ヨリ公然通知有之候ニ付本月十日午後六時ヨリ右三名ト會同シ(會同ノ場所ハ南山廳ナリ老人亭ト稱スル小亭ナリ)先ツ彼等ノ委任權限相懺メ候處彼等ハ政府ノ訓命ニ依リ改革ニ關シ日本公使ノ意見ヲ細聽シ自分等ノ意見ニ附シテ之ヲ政府諸大臣ノ前ニ申出テ諸大臣ト共ニ之ヲ大君主陛下ニ奏上シテ裁奪ヲ仰クニ止マレリ自分等ハ公使ノ勸告ヲ取捨折衷シテ改革ヲ斷行スル職權ナシト申出候ニ付一應其委任權限ノ不充分ヲ咎メ之ヲ斥ケント相試ミ候得共顧ミテ本件ノ性質ヲ考フレハ本ト勸告ニ止ルモノナレハ我ヨリ強テ充分ノ委任權ヲ有セル官員ト會商センコトヲ請求スルハ聊カ不穩當ニ有之ノミナラス當國ニ於テ内政改革ハ實ニ大難題ナレハ國王ト雖モ斷行覺束ナク況ンヤ二三ノ官員ニ斷行ノ責任ヲ負ハシムルコトハ到

P.V.M. 3 153

底強テ其能ハサルモノヲ追求スルモノニ付好結果ヲ得ルノ見込無之加之斯ル事柄ヲ争ヒ居ル間ニ徒ラニ日數ヲ經過スルノ恐レ有之候ニ付暫ク權限論ヲ措キ別紙甲號改革綱目ヲ提出シテ遂條説明ニ取掛リ申候然ルニ其日ハ點燈後凡一時間程説明シタルモ猶ホ其半ニ達セサルニ付翌十一日午後一時ヨリ再ヒ同處ニ會同シテ殘餘ノ各條ニ説明ヲ加ヘ終リテ別紙乙號期限實行案ヲ提出シテ協議ニ及ヒ候處期日ヲ限リ實行ヲ促スコトハ内政干預ノ嫌アリ若シ干預セラル、コトナラハ國ヲ以テ齟ル、迄モ從フ能ハストテ委員中頻リニ不同意ヲ相唱ヒ候得共日期ヲ限リ實行ヲ促スコトハ勸告ナリ決シテ干預ニアラス其勸告ヲ聽クト否トハ貴政府ノ權内ニ在リト云フ趣意ニテ説明相與ヘ候處委員等モ漸ク納得シテ乙號案ヲ取メ歸リ候抑、本官カ最初改革案提出ノ際我若シ漠然之ヲ提出シテ彼ハ漫然之ヲ受ケ口ニ改革同意ヲ唱ヘテ實効舉カラサルトキハ我勸告ハ徒勞ニ屬スルノミナラス切上ケ方ニ困難ス可シト愚考シタルニ付改革箇條中最モ緊急ヲ要スルモノ數條ヲ掲出シ三日内ニ之ヲ議定シテ十日内ニ實行ス可シ朝鮮政府若シ實行シ能ハストナラハ我勸告ヲ拒絶シタルモ同様ナリ我ハ之ヲ以テ勸告ヲ拒絶セラレタリト見做ス可

P.V.M. 3 154

シト言放チ更ニ第二ノ手段ニ取掛ルヘキ考案ニテ故ラニ期限ヲ定メテ施行
ヲ促シタルモノニ有之候將又右提案後内部ノ形勢ヲ探察スルニ大略別紙丙
號探情書ノ通リニテ國王ニハ改革ニ銳意セラル、傾アルモ諸大臣ハ兎角躊
躇シテ王命ヲ奉承セサルカ如クニ被推察候右ハ申迄モナク彼等因循姑息ニ
シテ有爲ノ氣象ニ乏シク而シテ外ハ支那ヲ恐レ内ハ閔氏ヲ憚ル結果ニ外ナ
ラサル義ト被考候委細ハ別紙探情書ニテ御承知相成度候扱昨十四日ハ提案
後三日目ニ相成候ニ付書面ヲ委員ニ送り面會相求メ候處公務ノ爲メ面會ノ
請求ニ應シ難キ旨申參リ候ニ付推返シ別紙丁號ノ通リ我勸告ニ對シ朝鮮政
府ノ採否如何ヲ相尋子候處同戊號ノ通リ我勸告ハ朝鮮政府ノ意見ト符合シ
感謝ニ堪ヘス委細ハ本日會同ノ際説明ス可キ旨申來リ候猶ホ本日會同ノ模
様ハ更ニ可申進不取敢此段及上申候也

明治二十七年七月十五日

特命全權公使大鳥圭介

外務大臣陸奥宗光殿

追テ別紙甲乙號ハ本月九日附機密第一二一號本七〇信ニ附屬候間此ニ
附添不致候也 (別紙ノ内甲乙號ハ前出其他ハ畧ス)

P.V.M. 3

155



(別紙第二十二號)

○内政改革ノ勸告ニ付朝鮮政府ノ回答大鳥公使ヨリ上申
機密第一二九號 水七四

當國內政改革勸告ノ義ニ付本月十、十一兩日會議ノ模様ハ機密第一二七號信ヲ以テ及其申候處同十五日午後三時ヨリ重テ該委員三名ト老人亭ニ會同シ我提案ニ對スル政府ノ決議如何ヲ相尋テ候處委員筆頭申正烈氏ハ書面ニ據リ永々ト演說有之候其大要ハ日本政府ノ勸告ハ感謝ニ堪ヘス朝鮮政府ニ於テモ十年以來内政改革ノ必要ニ心付漸次着手シタルモ未タ其實効ヲ取ムルニ至ラサルニ南道ノ民亂發生シ且ツ其他ノ地方ニ於テモ屢民擾相與リ候故此際改革ヲ斷行セサル可カラサルコト、廟議一決シ之カ爲メ大君主陛下ヨリ嚴重ナル勸令モアリ引續キ校正廳ヲ設ケ夫々委員ヲ命セラレタルコトナレハ遠カラス一新ノ政ヲ觀ルニ至ルヘシ貴公使ハ今大軍ヲ駐屯シ期限ヲ立テ、改革ノ實行ヲ促サル、コトハ聊カ内治ニ干預スル嫌アリ隨テ修好條規第一條ノ趣意ニ適ハス我政府ハ若シ貴公使ノ御請求ニ應スルトキハ恐クハ有約各國ハ均霑ノ例ニ依リ銘々勝手ノ注文ヲ申出ツヘシ左候時ハ朝鮮自

P.V.M. 3 156

主ノ體面ニ傷クル恐レアリ加之大軍駐屯ノ間ハ民心驚擾シテ治ラサレハ到底改革ノ目的ヲ達シ難カルヘシト考ヘリ依之貴公使ハ先ツ衛兵ヲ撤退被下且ツ乙號案即チ期限ヲ立テ實行ヲ促スモノヲ御繳回被下度トノ義ニ有之候ニ付本官ハ彼ノ申出ニ對シ一々辨明ヲ相與ヘ候處彼等ニ於テ稍納得ノ体ニ相見得候依之我勸告ニ對シ當政府ハ之ヲ採用シタル旨公文ニテ回答可致旨申入レ翌十六日中ニ政府ノ議定ヲ經テ一面ハ外務督辦ヨリ一面ハ委員ヨリ回答スルコトニ相約シ以テ當日ノ會議ヲ相結ヒ候處同日夕刻ニ至リ外務督辦ヨリ別紙甲號ノ通り委員ヨリハ同乙號ノ通り回答有之候其大要ハ甲ハ我留兵ヲ撤回セハ改革ニ着手スヘシト云ヒ乙ハ我留兵ヲ撤去シ且ツ提案ヲ繳回セハ改革ニ着手スヘシトノ趣意ニテ前日ノ協議ト大ニ相違致候得共前日ノ協議トテモ別ニ書面ヲ以テ約束シタルモノニ無之加之彼等ハ政府ノ議定ニ依リ此決答ヲ送り越シタル義ナレハ此上彼公文ヲ差戻シテ再ヒ協議ヲ重ヌルハ徒ラニ時日ヲ費スノミニテ好結果ヲ得難カル可ク寧口彼カ送り越シタル不満足ノ回答ニ付ケ入りテ我決意ヲ示シ引續キ第二段ニ相移リ候方事ヲ速決スルノ好方略ト相考候ニ付外務督辦ニ向テハ別紙丙號ノ通り委員

P.V.M. 3 157

四十四

ニ向テハ同丁號ノ通り回答ニ及ヒ置候依テ別紙四通相添此段及上申候也
明治二十七年七月十八日

特命全權公使大鳥圭介

外務大臣陸奥宗光殿

追テ本日安彌壽ノ來話ニ據レハ朝鮮政府ニテハ誰アリテ我ニ送ル答案
ノ起草者ナク依之新外務主事俞吉濬ハ筆ヲ執リ我勸告ヲ峻拒シタル嚴
重ノ文案ヲ作リタル處外務督辦始メ其他ノ人々之ニ添削ヲ加ヘ稍圓滑
ニ措ヘ替ヘタル趣ニ有之候俞氏等カ故ラニ我勸告ヲ峻拒セシムル文案
ヲ作リシハ現時ノ當局者ハ到底改革ヲ實行スル企望モナク且ツ其氣力
ナキヲ洞見シ寧ロ日韓ノ衝突ヲ早俄取ラセントスル考案ニ出テタルコ
ト、被推測候

(別紙書類ハ畧ス)

(別紙第二十三號)

○内政改革案拒絶ニ付朝鮮政府へノ掛合附大院君執政ノ件ニ付大島公使ヨリノ報告
機密第一三六號 本七九

貴大臣閣下ノ訓令ヲ奉シ内政改革案ヲ當國政府ニ提出シタルニ外務督辦並ニ改正委員等ハ先ツ我兵ヲ撤去シタル後朝鮮政府自ラ改革ヲ行フヘキ旨回答シタル趣ハ去ル十八日機密第一二九號ヲ以テ申進候處右ハ到底本官ニ於テ満足スヘキ回答ニ無之候ニ付我満足ヲ得ルカ爲メ機密信又ハ電信ヲ以テ追々申進候方針並ニ去ル十九日第五三號御電訓及本野參事官ノ携帶シタル御訓示ノ趣意ニ從ヒ左ノ四手段ヲ決行致候

第一 去ル十九日京釜間ニ軍用電線ノ架設ニ着手セリ右ハ追々御電訓ノ次第モ有之候ニ付可成平和ノ手段ヲ以テ彼ノ同意ヲ得テ築設可致ト存シ去ル七日別紙甲號ノ通り照會致候處乙號ノ通り照覆有之候依テ更ニ又丙號ノ通り辨駁相加ヘ候處丁號ノ通り回答致越候然ルニ本件電線架設ノ義ハ是非トモ施行スヘキ必要可有之ト存候間本官ハ遂ニ去ル十九日別紙戊號ノ通り照會シ即日架設ニ着手セシメ候

P.V.M. 6

第二 兵營ヲ設置スヘキ旨朝鮮政府へ照會セリ今日ノ模様ニテハ急ニ撤兵ノ運ニモ難至旁威力ヲ以テ當國政府ニ臨ムコトハ最モ必要ト存候間去ル十二日第三十六號御電信ノ趣旨ヲ奉シ別紙己號ノ通り照會及ヒ候ヘ共今ニ何等ノ回答無之又設營ニ至ラス候間追々催促可及積リニ有之候

第三 在牙山清兵撤回ヲ清國政府ニ請求スヘキ旨當國政府へ照會セリ
朝鮮政府カ曩ニ南方ノ民乱鎮定ノ爲メ借兵ヲ清國政府ニ申込ミタルニ清國政府ハ屬邦ヲ保護スル舊例ト稱シ兵三千ヲ牙山ニ上陸セシメ軍門ハ全羅忠清一帯ノ地ニ一ノ告示ヲ發シテ屬邦ヲ保護ス云々公布シタルハ朝鮮ノ獨立ヲ蔑視シ併セテ我修好條規ノ文面ト直接衝突スルニ付速ニ牙山ノ清兵ヲ撤回スヘキ旨本官ハ別紙庚號ノ通り照會及ヒ候處兼テ考案ナキノミナラス清國トハ從來ノ關係モ有之事トテ徒ラニ官中ノ會議ニ夜ヲ明カシ居タルニ折柄袁世凱突然ニモ歸國ノ途ニ上リタルカ爲メ一層政府部内ニテハ困却シタル様子ニテ我ニ對スル照覆モ三度迄書替ヘタル由ナルカ遂ニ去ル二十二日即チ回答期日ノ夜ニ至リ別紙辛號ノ通り漠然タル照覆ヲ差越シ候ニ付本官ハ斷然タル處置ヲ行フコト

P.V.M. 3



ニ決シ一面朝鮮政府へハ別紙壬號ノ通り照會シ一面ニハ大島旅團長トモ協議ノ上翌二十三日午前四時龍山ヨリ兵一聯隊並ニ砲工兵若干ヲ入京セシメ王城ヲ圍繞センカ爲メ之ヲ王宮ノ方ニ進メタルニ彼ヨリ發砲シタルニ付我兵之ニ應撃シ遂ニ彼ヲ逐ヒ退ケ城門ヲ押開キ闕内ニ進入シ其四門ヲ固メタリ(此出來事ニ付テハ別ニ報告可致候ニ付右ニ就テ御詳覽相成度候)
又各國公使館へハ即日直チニ別紙イ號ノ通り回文相發シ置候

第四 中朝商民水陸貿易章程中江通商章程及吉林通商章程ヲ廢棄スヘキ旨朝鮮政府へ照會シタリ

從來清國カ朝鮮ニ對スル處置ハ全ク屬國扱ヒニシテ該章程ノ如キモ其實清國皇帝之ヲ制定シテ朝鮮ニ遵奉ヲ命シタルモノナレハ該章程ノ効力アラン限リハ朝鮮政府ハ我修好條規ヲ犯スモノニ付本官ハ朝鮮政府ニ對シ之カ廢棄ヲ宣言シ我ニ對スル遵約ノ實ヲ示スヘキ旨別紙癸號ノ通り照會致候之ニ對シテハ未タ何等ノ回答無之候

右ハ本官カ可成速ニ是非ノ決局相付度考テ以テ公然當國政府ニ對シ施行シタル處分ノ大要ニ有之事体稍輕カラサルモノニ候得共此際斷然清朝間主屬ノ關係ヲ絶タサレハ當國ノ獨立ヲ鞏固ニシ併セテ内政ノ改革ヲ行ヒ難カル

ヘント信シ決行致シタル次第ニ有之候

右ハ表向ノ運動ニ有之候へ共裏面ニ於テ種々探偵相用ヒ候處一般ノ人氣ハ全ク大院君ニ向ヒ同君モ亦全ク青雲ノ志ナキニアラサル様子ニ付兼テ申進候通金嘉鎮、安彌壽、岡本、小川等ヲ利用シ先ツ大院君ヲ入閣セシムルコトニ盡力致候得共同君ハ今一步ノ處ニ至リ決シ兼ヌル様子有之誠ニ隔靴ノ感有之候間種々苦心致候處同君ノ股肱ニシテ大院君清國ヨリ歸韓以來捕盜廳ニ幽囚サレ居ル鄭雲鵬ヲ獄ヨリ取出シ之ヲ勸メテ大院君ヲ説カシムルニ加カストノ事ニ付非常ノ手段トハ存候得共去ル二十三日午前一時國分書記生ヲシテ兵卒十名巡查十名ヲ從ヘ右捕盜廳獄屋ニ赴カシメタルニ夜深ノ事トテ一般ニ寂寥誰トテ傍リニ見ルモノ無之ニ付始メノ間ハ彼此鄭ニ於テ故障云ヒ立テタルモ遂ニ難ナク之ヲ引出シ當館ニ連レ來リタル處一時ハ稍驚キタル様子ニテ自分カ今不圖モ大院君ニ見ユルヲ得ルハ實ニ歡喜ニ堪ヘサルモ自分ハ國王陛下ノ命ニヨリ禁錮中ノ者故日本人ノ手ニテ解放セラレハハ不本意ナル旨相述ヘ候得共追々利害ヲ説テ大院君出テサレハ國民ヲ救フヲ得サル旨説明致候處彼モ遂ニ之ニ服シ候ニ付國分書記生ハ此ト同道直チニ同君

邸ニ赴キタルニ大院君容易ニ蹶起スヘキ模様無之候得共鄭雲鵬種々諫告スル所アリタリシ爲メ大概ハ出仕ニ決心セリ乍然此問答ニ時刻相移リ夜モ明ケ來リ候内我兵ト韓兵トノ間ニ發砲起リ遠クヨリ望見スルニ或ハ國王陛下闕後ニ落行カレタル事アル間敷ヤノ疑慮有之候ニ付本官モ一方ナラス心配シ遂ニ杉村書記官ヲ大院君邸ニ遣シ速ニ出世方相促シ候處同君ノ心中全ク出世ニ意アルモ日本人ニ強弁ラレ出テタリト云ハ、當國人間ノ評言モ有之候ニ付態ト我勸告ニ應セサル様子ヲ假裝シ只管國王陛下ヨリ勅使ノ至ルコトヲ待チ居タリ此時安彌壽翁吉濬等ハ大院ト同君邸トノ間ニ奔走シ遂ニ勅使ヲ差立ツルコトニ至リタルニ付大院君此ニ斷然決意ヲナシ勅使ノ歸邸ニ引續キ直チニ參内セラレタリ

是ヨリ先キ大院内ニテハ閔家ノ一族我兵ノ侵入ニ驚キ追々後門ヨリ逃走シ亞閔ノ輩モ之ニ續キ闕内稍騷擾ヲ極メタルカ爲メ大君主陛下ハ特ニ外務督辦ヲ當館ニ遣ハシ速ニ本官ニ參内可致旨王命有之候間本官ハ直チニ入闕可致答ナリシモ同人韓人共ニ驕夫ニ不足相告ケ容易ニ纏マラサリシニ付遂ニ十一時頃漸ク出館參内致候處此時大院君モ亦參内相成久々ニテ父子ノ對面

滿悅感泣ノ觀アレハ大院君怒テ國王ノ失政ヲ責メ陛下ハ之ヲ謝スル實アル等一時ハ圖ラサル演劇ヲ呈シ候其内大院君ハ正堂ニ出來リ本官ニ對シ大君主ハ本日貴公使ヲ引見可致答ナリシモ何分ノ取込ニテ混雜ニ付自分代テ進謁ヲ受クル旨ヲ述ヘ且ツ自分ハ大君主ノ命ニヨリ自今政務ヲ統轄スヘキニ付當國內政改革ノ事ハ追テ委シク貴公使ニ御協議可及云々述ヘラレ候ニ付本官ハ先ツ大君主陛下ノ無恙ナリシヲ祝シ次テ大院君執政ノ賀辭ヲ述ヘ引取リ申候又各國使臣ニモ同二十三日午後三時進宮同シク大院君ニ謁見致候右御報告ニ及候也

明治二十七年七月二十五日

特命全權公使大島圭介

外務大臣陸奥宗光殿

P.V.M. 3 164

P.V.M. 3 163

四十四

(別紙甲號)

第七十壹號

以書東致啓上候陳ハ貴國京城ヨリ釜山ニ至ル電線ハ我曆明治十八年十二月
 中貴我兩國ノ間ニ訂結サレタル海底電線設置條約續約ニ由リ貴政府ノ義務
 トシテ御架設相成候處其後該電線幾回トナク破損不通ノ事アリテ架設ノ效
 用充分ナラス現ニ我曆本年五月下旬已來久シク閉塞シテ通信ノ便ヲ缺キ數
 日前ニ至リテ漸ヤク開通シタリト雖モ從前ノ實驗ニ徵スレハ何時再ヒ閉塞
 スルヤ難計候畢竟工事不充分ニシテ輕微ノ變災ニモ堪ユル能ハス因テ以テ
 屢破損ヲ致スモノト推斷セラレ候依之目下該兩地間ニ堅善ノ電線ヲ架設ス
 ルコトハ最モ急要ニ且ツ貴政府ノ義務ニ屬スルコト、相認メ候間至急舊線
 修繕ニ御着手相成候カ若クハ新線ヲ架設セラル、様致度候右ニ付我電工數
 百名既ニ釜山及仁川ニ到着致候間直チニ差立御幫助可致ト存候若又貴政府
 ニ於テ早速起工ノ御詮議難相成ニ於テハ我政府ハ暫ク別線ヲ架設シ以テ貴
 我兩國通信ノ便利ヲ相圖リ可申ト存候尤モ該路ハ本國官報ヲ取扱フニ止マ
 レハ貴國線ニハ差シタル影響無之儀ト存候就テハ貴政府ニ於テ該工事至急

P.V.M. 3 165

御着手可相成哉右ハ可成速ニ御回答相成候様致度茲ニ本國政府ノ訓令ヲ奉
 シ及御問合候此段照會得貴意候敬具

明治二十七年七月七日

(別紙乙號)

逕啓者再昨接展

貴照悉爲京釜電綫暫自架設一事有損我政府權利。碍難勉副。正擬照復之際。疊展
 來函壹是前因。查該綫曩因風雨跨月。雖暫阻斷。現在依舊捷通。毋須過慮。設或有時
 致損。自應由我電局工頭人等隨損隨葺。庶不延誤也。乃

貴公使一再催辦硬要代設。殊出本督辦意慮之外。曷勝驚訝。凡係國內設線。自是我
 政府自行之權

貴公使不應有此越俎之議也。爲此佈復。尙祈

照亮爲荷。並頌

午安。

趙秉稷

頓

甲午六月初七日

P.V.M. 5 166



(別紙丙號)

第七十四號

敬啓者。昨接貴曆甲午六月初七日

貴督辦覆函。內開京釜電綫暫自架設一事。有損我政府權利。碍難勉副。乃貴公使一再催辦。硬要代設。殊出本督辦意慮之外。曷勝驚訝。凡係國內設綫。自是我政府自行之權。貴公使不應有此越俎之議也云々等因。准此閱悉。本公使查我政府欲爲

貴國代設京釜電綫。始非所好。祇因此綫本係按照兩國海底電綫條款續約

貴政府有所擔責而設。乃爾構造粗率。動輒爲風雨撲損。誠不足以收通線實効。料

貴督辦亦所洞悉。查於上年間。由本署寄發電報。共五十六道。內有二十道。實因南線

阻塞。祇得由北線寄發者。如本年則較上年南線阻塞爲日愈多。而來函乃稱。或有時

致損。自應由我電局工頭人等隨損隨葺。庶不延誤等語。奈徵之已往事蹟。則現設電

線之究無足依賴。已可概見也。故在

貴政府將原設電綫從速加修堅固。若或遲速開工架設新線。俾無消息梗塞之患。是

乃

貴政府遵照條約所定當盡之責也。倘未能從速定擬開工。則由我政府暫架一線。以

期彼此電行毫無阻絕之虞者。亦勢所不獲已。孰謂好損

貴政府之權利者乎。惟既

貴政府不願遵約架設堅實電綫。則於我政府代爲架設。亦應無峻拒之理。想

貴督辦就前開各節詳加核閱。亦自以本公使之言爲不謬也。本公使茲特敷衍第七

十一號公文之意。再行佈聞。即希

貴督辦諒照可也。此順頌

時祉。

大鳥圭介

我七月初十日

趙大人臺照

(別紙丁號)

逕啓者。昨准貴曆七月十日

貴來文第七十四號均已閱悉。本督辦查京釜電綫曩時阻塞。非緣構造粗率。風雨撲損。有非人力所可預防。現在修改已完。信息靈通。嗣後設有因災暫阻之時。應由我電局盡心措辦。速就堅實。自無阻絕之患。毋煩

P.V.M. 3 168

P.V.M. 3 167

貴公使用慮過當也。至暫架枝線一節。按照萬國通例。參以本國情形。并無允許別國設線之由。本政府未便將此項權利讓與貴政府。以啓後弊。所以本督辦斷難允同來意。已在前牒詳述。諒邀燭及。尚望貴公使平心照亮。毋再相強可也。并頌暑安。

趙秉稷 頓

甲午六月初九日

P.V.M. 3 169

(別紙戊號)
第八十號

敬啓者。此次由我國暫自架設京釜電線一事。蒙准貴曆甲午六月初九日。貴督辦來函駁覆云々各節。均已閱悉。惟查此事緣由。已經本公使第七十一號第七十四號文函兩件內詳叙。所有京釜電線本屬貴政府。遵約擔責而設。祇以構造粗率。動輒爲風雨所損。難期收効。稽之實在情形。顯然可見。因我國據約請設堅實電線。而貴政府仍不願遵行。故不得不由我暫自代設而已。總之現設京釜電線。既不堅實。則我所請並非無理。且不得謂之侵損貴國權利者也。應由本日起分飭電工。自京釜兩地分。手工動工矣。即希貴督辦照諒可也。此佈。順頌台祉。

大鳥圭介 頓

我曆七月十九日

(別紙己號)
第八十一號

以書東致啓上候陳者。我曆本年六月中。本國政府ヨリ明治十五年八月。貴我兩國間ニ訂結相成リタル濟物浦條約第五款ニ遵照シ警備兵若干派遣相成候儀ハ兼テ及御通知置候處。右ニ對スル兵營ノ義ハ同款內設置修繕兵營朝鮮國任之一節ニ據リ。貴政府ニ於テ御設置可相成モ。有之候間。至急本館近傍ノ地ニ於テ警備兵壹千餘名ヲ納ルヘキ兵營御設置相成候様致度。此段御照會得貴意

P.V.M. 3 170

候敬具

明治二十七年七月十九日

特命全權公使大鳥圭介

督辦交涉通商事務趙秉稷閣下

(別紙庚號)
第八十三號

以書東致啓上候陳者貴朝鮮國ハ本來自主ノ邦國ニシテ何レノ邦國ニモ羈屬セサルコトハ日朝修好條規第一款ニ之ヲ明載シ尙ホ貴曆本年五月二十七日貴署公文第十六號及我曆本年七月二日日本署公文第六十六號ヲ以テ益々其意義ヲ慥メ候儀ハ貴政府ニ於テモ御熟悉ノ儀ニ有之候然ル處本年六月初旬清國政府カ其兵ヲ派送スルニ當リ我政府ニ通知シタル公文中我朝保護屬邦舊例ト稱シ且ツ清國番軍門カ牙山ヨリ全州ニ至ル各地方ニ告示シタル文中竟有我中朝愛恤屬國不忍坐視不救或保護藩屬等ノ各字樣ヲ以テシタルハ明瞭ニ貴國ノ獨立ヲ無視シ自主ノ權利ヲ損害シタルモノト認定致候右清國政府ノ通知ハ本署本年第五十九號公文ニ附屬シテ貴督辦ニ及御回示候ニ付既ニ

御熟閱ノ儀ト存候番軍門ノ告示ハ即チ別紙甲號ノ通りニテ本公使ハ其事實ヲ慥メンカ爲メ嘗テ之ヲ清國總理袁氏ニ問合候處我曆本年七月一日ヲ以テ同總理ヨリ別紙乙號ノ通り事實無相違旨回答シタルモノニ有之候依之貴政府カ右等不正ノ名義ヲ以テ派來セル清兵ヲ永ク貴境内ニ駐在セシムルコトハ貴國自主獨立ノ權利ヲ侵害シ隨テ日朝條約ニ載セタル朝鮮自主ノ邦保有與日本國平等之權一節ヲ無視スルモノニ付速ニ之ヲ貴境外ニ退去セシメ以テ貴政府守約ノ義務ヲ完フセラレンコト深ク希望スル所ニ有之候右清兵ヲ退去セシムル義ハ固ヨリ差急キ候儀ニ付迅速御決行相成度且又右ニ付貴政府御決議ノ趣ハ明後即チ我本月二十二日迄ニ御回答有之候様致度候萬一貴政府ノ御回答延行スルニ於テハ本公使自カラ決意スル所可有之ト存候此段照會得貴意候敬具

明治二十七年七月二十日

特命全權公使大鳥圭介

督辦交涉通商事務趙秉稷閣下

(別紙甲、乙兩號ハ附屬セス)

(別紙幸號)

第十八號

大朝鮮督辦交涉通商事務趙

爲

照覆事。照得我曆本月十八日。即貴曆七月二十日。接准

貴來文。內開案照貴國本係自主之邦。始無所隸屬。是乃日朝修好條規第一款。首行載明。併有貴曆本年五月二十七日。貴督辦第十六號來文。以及我曆本年七月初二日。本公使第六十六號公文。更將此約款旨意。備切闡明。而貴

政府所見亦必無貳於此也。惟查本年六月初旬。清國政府遣發軍隊也。先行知照我國

政府。內稱。我朝保護屬邦舊例等因。且清國肅軍門。在牙山全州一帶地方。遍貼告示。竟有我中朝愛恤屬國。不忍坐視不救。或保護藩屬等字樣。愈可見清國之蔑視貴國獨立之本。侵損自主之權也。其清國政府知照之文。已於本公使第五十九號公文。抄附呈閱。早邀燭鑒矣。而至肅軍門告示。曾由本公使照會清國總理袁。質詢真偽。旋於我曆本年七月初一日。接准覆文。稱係真實等因。即希就鈔附甲乙兩號公文。知其備詳可也。如果貴

政府容此名義。失正之清軍。久留境內。是則非翹貴國自主獨立之權。爲所侵損。且將日朝條約所載。朝鮮自主之邦。保有與日本國平等之權一節。視同具文。殊屬不成。統應由貴

政府。亟令清軍。退出境外。以全守約之責。是本公使切望於貴政府者也。但事關緊急。務須迅速施行。是爲切要。併將貴

政府如何議定之處。限於明後日。即我曆本月二十二日內。覓覆確音。倘或貴也等因。准此查我國爲自主之邦。保有與

貴國平等之權。已載朝日條約。及我國內治外交。向由自主。亦爲中國之素知各節。我曆本年五月二十七日。業經照覆在案。此次肅軍門告示一節。本督辦所未及聞知。

貴公使既照會袁總理。質詢真偽。則仍向袁總理下論可也。至清軍久在境內。寔因我國請援而來。南匪稍平之後。已屢請其撤回。而未即退。亦如

貴兵之尙今住留也。方更要唐代辦轉請中國政府。從速退兵。爲此合行照覆。貴公使。請煩查照可也。須至照覆者。

右 照 會

大日本特命全權公使大鳥

甲午六月二十日

(別紙壬號)

第八十五號

以書翰致啓上候陳者貴曆本年六月二十日貴照會第十八號ヲ以テ云々御申越ノ趣致拜承候查スルニ清國政府知照中我朝保護屬邦舊例等語ヲ掲ケタル義ニ付テハ先般本公使ヨリ公然及御照會候ニ付貴政府ニ於テハ既ニ御熟悉ノ義ニ有之候聶軍門ノ告示ニ至テハ牙山ヨリ全州ニ至ル各地ニ貼附シタル事ナレハ是亦貴政府ニ於テ素ヨリ御承知可相成答ト存候然ルニ今貴督辦ハ徒ラニ與本國無涉或ハ未及聞知等語ヲ以テ其責ヲ免カレントセラル、ハ是レ貴國自ラ其自主獨立ノ權利ヲ墜損シ併テ日朝條約朝鮮自主ノ邦有與日本國平等之權一節ヲ無視スルモノニシテ本公使ノ斷然同意シ能ハサル所ニ有之候依之此際貴政府ヲシテ條約明文ヲ遵守セシムルカ爲メ満足ナル回答ヲ要

P.V.M. 3 175

求スルハ我政府カ當然爲ス可キコト、致確信候間右ニ付至急御回答有之候様致度候猶ホ貴政府ヨリ満足ナル回答ヲ與ヘラレサルニ於テハ時宜ニ依リ我權利ヲ保護スルカ爲メ兵力ヲ用フルコトモ可有之ニ付右豫メ御承知相成度此段照會得貴意候敬具

明治二十七年七月二十三日

特命全權公使大鳥圭介

督辦交涉通商事務趙秉稷閣下

(別紙癸號)

第八十四號

以書簡致啓上候陳者從來貴國ト清國トノ間ニ成立シタル中國朝鮮商民水陸貿易章程中江通商章程及吉林章程ハ孰モ貴國ヲ以テ清國ノ藩封若クハ屬邦ト爲シ清國ノ君主權ヲ以テ之ヲ制定シタルモノト被相認候處之ヲ貴國既往現今自ラ内治外交ヲ主宰セラル、實情ニ照スニ全ク事實ト致相違候依之我政府ハ是迄該各章程ヲ以テ全ク空文ニ屬スルモノト看過シ敢テ其意ニ介セサリシ處今般清國政府ハ保護屬邦ト稱シテ其兵ヲ貴國ニ進メタルニ及ンテ

P.V.M. 3

176.

五十五

始メテ該各章程ハ空文ニアラサルモノト致判断候因テ查スルニ該各章程ハ果シテ空文ニアラス事實現行ノモノニ有之候時ハ全然貴國自主獨立ノ權利ヲ侵害シ隨テ日朝修好條規ニ載セタル朝鮮國自主之邦保有與日本國平等之權一節ヲ無視シタルモノト致確認候就テハ貴政府ハ貴國自主ノ權利ヲ保護シ且ツ我國ニ對スル條約遵守ノ義務トシテ至急清國政府ニ對シ該各章程ノ廢棄ヲ宣言セラレ其趣併セテ我政府ヘモ御通知相成候様致度此段照會得貴意候敬具

明治二十七年七月二十日

特命全權公使大島圭介

督辦交涉通商事務趙秉稷閣下

(別紙イ號)(譯文)

拜啓陳者下名ハ同僚各位ノ御心得ノ爲メ左ノ回章差進候

日本及朝鮮兩政府間ニ於ケル談判ノ進歩ハ目下龍山ニ屯營スル日本兵ノ一部ヲ京城ニ入ラシムルコトヲ必要ト致候ニ付日本兵ハ今朝四時頃南門ヨリ

京城ニ入り王宮背後ノ山上ニ屯營スルノ目的ヲ以テ王宮ノ側面ニ沿フテ進行致居候際王宮ノ守衛兵及其近傍市街ニ屯在シタル朝鮮兵等突然我兵ニ向テ甚シク發砲ヲ始メ候ニ付我兵ハ正當防禦ノ爲メ應砲致候處朝鮮兵ハ猶ホ引續キ發砲致シ候ニ付終ニ王宮ニ入りテ之ヲ守衛スルコトノ止ムヲ得サル様相成候

下名ハ同僚各位ニ前述ノ事實ヲ報道スルト同時ニ日本政府ハ朝鮮ニ對シ聊カ侵畧ノ意ヲ抱カサルコトヲ確言シ得ルハ幸甚ノ至リニ候下名ハ茲ニ同僚各位ニ向ヒ重子テ敬意ヲ表シ候敬具

大島圭介

P.V.M. 3 178

P.V.M. 3 177

五十一

(別紙第二十四號ノ一)

○事變後大闕内ノ模様、内政改革ノ進行并ニ外交上變更ノ件ニ付大鳥公使ヨリ具報

機密第一三八號本八〇

本月二十三日事變後引續キ我兵ハ王宮ヲ守衛シ宮門ノ出入ヲ監督シ本館ヨリ發附シタル門票ヲ有スルモノ、外ハ出入ヲ許サス以テ雜人ノ濫入ヲ相拒ミ居候大院君其外朝鮮官員中ニハ我兵ノ守衛ヲ撤去センコトヲ頻リニ希望致候得共右ハ表面ノ飾辭ニ過キサル色有之加之改革派ノ人々ハ改革ヲ整頓スル間當分守衛ヲ存センコトヲ望ミ候ニ付本官ニ於テモ新政府ノ組織成リ韓兵ノ逃散シタルモノヲ呼集メ再ヒ守衛ニ充ツルニ足ルニ至ル迄ハ王宮ノ守衛ヲ存シ置可申ト存候將又京城内外ニ在ル韓兵ノ營所ヘハ去ル二十三日ヨリ二十五日迄ニ我兵ヲ派シテ之ヲ逐拂ヒ兵器ヲハ盡ク之ヲ我手ニ收メ候ニ付目下京城内外ニハ一人ノ韓兵ナキ姿ニ有之候

P.V.M. 3 179

新政府創立改革實施ノ進行ハ運々トシテ相抄取り不申候大院君入闕ニ先チ金炳始、鄭範朝、趙秉世、金宏集ノ四大臣、外務督辦趙秉稷、統禦使申正溆等數人ヲ招キ又同君ノ入闕ト前後シテ金嘉鎮、安嗣壽、趙義淵、俞吉潁等ノ日本派十人程入闕シタリト雖モ闕内ノ混雜ト韓官ノ不決斷トノ爲メ決行シタル事件ハ僅ニ改革派十數人ノ任命ニ相過キ不申候尤モ本日ハ新ニ金宏集ヲ舉ケテ領議政ト爲シ軍國機務處會議ヲ開キ其議決シタル所ハ大院君ヲ經テ奏上シ國王ノ載可ヲ得テ直チニ施行スル手續ニ相成リ可申ト存候事變後新任并ニ軍國機務處會議總裁并ニ議員ハ別紙甲號ノ通りニ有之候

我請求ニ係ル在牙山清兵ノ撤回一事ハ朝鮮政府ハ遂ニ我請求ニ應シ一昨二十五日本官參内ノ時外務督辦ノ名ヲ以テ代辦ノ依頼有之候得共其文体不穩當ニ付改正方協議中ニ有之候其外清、韓間ニ既訂ノ水陸通商章程中江章程吉林貿易章程ノ廢棄モ我請求ニ應シ同日當地駐在清國領事袁世凱代理唐紹儀ニ通告シ同時ニ別紙乙號ノ通り本官ニ通知有之候又同唐代理ハ何等ノ通知ヲモ爲サス卒然本日出發歸國ノ途ニ上リ候猶ホ詳細ノ事情ハ後便ヨリ上申可及候不取敢概畧及具報候也

明治廿七年七月廿七日

特命全權公使大鳥圭介

外務大臣陸奥宗光殿

P.V.M. 3180

追テ去ル廿四日韓廷發布ノ詔勅并ニ新官授任及赦免處罰人名表廿六日
發布達文寫等御參考迄差進候也
(別紙書類畧ス)

五十三

P.V.M. 3 181

REEL No. 1-0049

0145

(別紙第二十四號ノ二)

七月二十八日大島公使ヨリ外務大臣へ左ノ電報達セリ

大院君ハ新政府組織中ニシテ金嘉鎮安綱壽及其他開化黨ニ屬スルモノ
採用セラレタリ閔泳駿閔應植及其他閔黨ノ多數ハ大院君ノ命ニ由リ流
罪ニ處セラレタリ督辦交渉通商事務ハ公信ヲ以テ朝鮮政府ノ爲メニ牙
山ノ清兵ヲ退去セシムルコトヲ依頼セリ

五十四

P.V.M. 3

182

REEL No. 1-0049

0145

(別紙第二十五號)

○朝鮮政府ト假條約訂結ノ件ニ付大島公使ヨリ上申

機密第一七三號本九七

本年七月二十三日事變後ノ關係ヲ定ムル爲メ兩國政府ノ間ニ假條約ヲ訂結スル事ニ關シ本月一日附機密第四十三號本八三信ヲ以テ條約案相添具申ニ及ヒ置候處其後双方協議ヲ重キ且ツ御電訓ノ趣ニ隨ヒ改正ヲ加ヘ漸ク同月二十日ニ至リ別紙甲號ノ通り確定調印致シ候依テ改正ヲ加ヘタル箇條大略左ニ申述候

表題ハ元ト條約トアルヲ御電訓ニ從ヒ合同ト相改メ申候

第一條 ハ朝鮮政府ノ請求ニ從ヒ同政府ノ体面ヲ維持センカ爲メ字句ヲ變更シタルモ其趣意ハ同様ニ有之候

第二條 鐵道築設ニ係ル件ハ兼テ内報ニ及ヒ置タル英、韓ノ内約ニ制セラレ餘義ナク目下委曲情節アリテ其運ヒニ及ヒ難シ依テ良法ヲ案出シ可成丈速ニ訂約起工ノ運ヒニ至ルヲ要ストノ一節ヲ相添申候

第三條 朝鮮政府ノ請求ニ依リ電信ノ上ニ「軍用」二字ヲ相添申候

第四及第五條 ハ從前清國政府ト類似ノ密約アリシカ爲メ朝鮮政府ハ之ヲ條約ニ載スルヲ好マス單ニ外國人ヲ雇入ル、コト、爲シタシト申出候ニ付再三協議ノ末之ヲ削除シ代フルニ公文ニ通テテセリ右ハ別紙乙、丙兩號ノ通りニ有之候

第七條 朝鮮政府ノ請求ニ從ヒ兩國兵ノ衝突ヲ偶然ノ衝突ト改正致候

第八條 御電訓ノ趣意ニ從ヒ保護ノ二字ヲ鞏固ト改メ候

別紙相添右申進候也

明治廿七年八月廿五日

特命全權公使大島圭介

外務大臣陸奥宗光殿

(別紙甲號)

大日本兩國政府ハ日本曆明治二十七年七月二十三日漢城ニ於テ兩國兵ノ偶爾衝突ヲ興シタル事件ヲ治メ併ニ將來朝鮮國ノ自由獨立ヲ鞏固ニシ且ツ彼此ノ貿易ヲ獎勵シ以テ益兩國ノ親密ヲ圖ランカ爲メ茲ニ合同條款ヲ暫定スルコト如左

暫定合同條款

- 一 此度日本政府ハ朝鮮國政府ニ於テ内政ヲ改革センコトヲ希望シ朝鮮政府モ亦其急務タルヲ知覺シ其勸告ニ從ヒ勵行スヘキ各節ハ順序ヲ追テ施行スヘキコトヲ保証ス
- 一 内政改革ノ節目中京釜兩地及京仁兩地間ニ建設ス可キ鐵道一事ハ朝鮮政府ニ於テ其財政未タ裕カナラサルヲ慮カリ日本政府若クハ日本ノ或ル會社ニ訂約シ時機見計ヒ起工センコトヲ願フト雖モ目下委曲情節アリテ其運ヒニ及ヒ難シ依テ良法ヲ案出シ可成丈速ニ訂約起工ノ運ヒニ至ルヲ要ス
- 一 京釜兩地及京仁兩地間ニ於テ日本政府ヨリ既ニ架設シタル軍用電信ハ時宜ヲ酌量シテ條款ヲ訂立シ以テ其存留ヲ圖ル可シ
- 一 將來兩國ノ交際ヲ親密ニシ且ツ貿易ヲ獎勵センカ爲メ朝鮮政府ハ全羅道ノ沿岸ニ於テ一通商港ヲ開ク可シ
- 一 本年七月二十三日王宮近傍ニ於テ起リタル兩國兵員偶爾衝突事件ハ彼此共ニ之ヲ追究セサル可シ

- 一 日本政府ハ素ト朝鮮ヲ助ケテ其獨立自主ノ業ヲ成就セシメンコトヲ希望スルニ因リ將來朝鮮國ノ獨立自主ヲ鞏固ニスル事宜ニ關シテハ兩國政府ヨリ委員ヲ派シ會同議定ス可シ
- 一 以上開ク所ノ暫定條款ハ畫押蓋印ヲ經タル後時宜ヲ酌量シ大關護衛ノ日本兵員ヲ以テ一律撤退セシム可シ
- 右暫定合同條款内永遠ニ遵守ス可キモノハ後日更ニ條約トシテ遵行ス可シ此カ爲メ兩國大臣記名蓋印以テ憑信ヲ昭ニス
- 大日本國明治二十七年八月二十日 特命全權公使大島圭介
- 大朝鮮國開國五百三年七月二十日 外務大臣 金允植

(別紙甲號漢文)

大朝鮮國政府欲將朝鮮曆開國五百三年六月二十一日兩國兵丁在漢城偶爾接仗一事妥爲調理又期以朝鮮國獨立自主丕基更臻鞏固併將通商貿易之道亟行獎勵推充以圖兩國交誼彌加敦密茲暫定合同條款開列于左

暫定合同條款

一 此次日本國政府深望朝鮮國政府釐正內治。朝鮮國政府亦知其寔屬急要之務。至允依勸勉勵行各節。須明保取次認真施行。

一 釐正內治節目中。京釜兩地以及京仁兩地。擬修鐵路一事。朝鮮政府顧此時庫欸未裕。本願與日本國政府若或日本國公司訂約。訂合同及時興工。祇因朝鮮政府現有委曲情節。礙難照辦。但仍須妥籌良法。務速克成所期為要。

一 在京釜兩地以及京仁兩地。由日本國政府已設軍務電線。酌量時宜。妥訂條款。仍可存留。

一 因念將來兩國交誼。務俾輯睦。以及獎勵商務起見。朝鮮國政府允在全羅道沿海之地。開通商口岸一處。

一 本年七月二十三日在

大關相近之地。兩國兵丁偶爾接仗。言明彼此各願不必追究。

一 日本國政府素願襄助朝鮮國。俾其克成獨立自主之業。故於將來與鞏固朝鮮國之獨立自主相關事宜。另當由兩國政府派員會同妥議定擬。

一 以上所開暫定條款。經畫押蓋印訂定後。酌量時宜。方可將在

P.V.M. 3 187

大關護衛之日本國兵一律撤退。

以上暫定合同條款內。其可永遠循守者。須日後更作條約遵行。為此兩國大臣記名蓋印。以昭憑信。

大朝鮮國開國五百三年七月二十日 外務大臣 金允植

大日本國明治二十七年八月二十日 特命全權公使大島圭介

(別紙乙號)

大朝鮮督辦交涉通商事務金

照會事。照得。此次我政府欽奉

大君主陛下勅旨。釐革國政。實事求是。以拯時弊。於是遠考

典謨。廣參內外。業已首行釐定官制。應於本月二十日起。按制施行矣。祇以釐定庶

政內。其係淑行者。素非我國官宦所練習。就維

貴國政府與我國雅重友誼。於我國舉行富強實政。始終有所襄成。以昭輔車唇

齒之義。是我政府素所深感也。現欲仰賴

貴政府選擇推薦。招聘明達政務碩士數員。以充施政顧問。而我政府之畫策宏

P.V.M. 3

188



謨期在必行。相應照請
貴公使。即將此意轉詳

貴政府。務副我政府誠心相求之意。是為殷盼。至應聘人員薪金。以及應需何項
人員。當由本督辦隨時與

貴公使商酌一切也。為此備文照會
貴公使。請煩查照施行。須至照會者。

右 照 會

大日本特命全權公使大島
開國五百三年七月十九日

(別紙丙號)

大朝鮮督辦交涉通商事務金

照會事。照得。此次我軍務大臣欽奉我

為

P.V.M. 3

大君主陛下勅旨。釐定本國軍制。因欲參酌各國軍制。擇宜倣行。以成勁旅而嚴防務。
祇以我國素乏諳練各國軍制之人。願賴

189

貴政府襄助。期成宏圖。因擬招聘

貴國陸軍武員。一則共同釐定軍制。一則訓練隊伍。為此照請

貴公使。即將此意轉詳

貴政府。妥為選擇妥善人員。俾便招聘。是為切盼。為此備文照會

貴公使。請煩查照施行。須至照會者。

右 照 會

大日本特命全權公使大島
開國五百三年七月十九日

190

P.V.M. 3



(別紙第二十六號)

○日、朝兩國盟約調印ノ件ニ付大鳥公使ヨリ上申

機密第一七四號本九八

本年七月二十五日已降日、朝兩國ハ清國ニ對シ攻守相助クルノ位地ニ相立チ候ニ付其事實ヲ明カニシ并ニ兩國ノ責務ヲ愼メンカ爲メ盟約スヘキ趣意ヲ取調ヘ本月十四日第四十六號電信ヲ以テ伺出テ同二十五日重テ電信ヲ以テ盟約案ノ御承諾ヲ申請致候處翌二十六日右御承認相成候旨ノ御電訓相達候ニ付即日外務衙門ニ至リ調印取計候依テ同盟約和漢文寫別冊差進メ候間御一覽相成度候扱又同約書ノ冒文ニ本年七月二十五日清兵ノ撤退ヲ依頼シタル一節ヲ掲ケ以テ訂約ノ由來ヲ引起シタルハ則チ同日已後日、韓兩國ハ清國ニ對シ攻守同盟ノ位地ニ立シテ明カニシタル義ニ有之候其他第一條以下ハ本文ニテ御承知相成度候別冊相添ヘ此段及上申候也

明治二十七年八月二十七日

特命全權公使大鳥圭介

外務大臣陸奥宗光殿

P.V.M. 3 191

(別冊)

大日本兩國盟約

大日本兩國政府ハ日、朝兩國盟約ニ於テ朝鮮國政府ヨリ大朝鮮兩國政府ハ朝鮮曆開國五百三十七年六月二十三日ニ於テ朝鮮國政府ヨリ清兵撤退一節ヲ以テ朝鮮國京城駐在日、朝兩國政府ハ清國ニ對シ既ニ攻守相助クルノ位地ニ立テリ就テハメタル以來兩國政府ハ清國ニ對シ既ニ攻守相助クルノ位地ニ立テリ就テハ其事實ヲ明著ニシ併ニ兩國事ヲ共ニスルノ目的ヲ達センカ爲メ下ニ記名セラル兩國大臣ハ各全權委任ヲ奉シ訂約シタル條款左ニ開列ス

第一條

此盟約ハ清兵ヲ朝鮮國ノ境外ニ撤退セシメ朝鮮國ノ獨立自主ヲ鞏固ニシ日、朝兩國ノ利益ヲ増進スルヲ以テ目的トス

第二條

日本國ハ清國ニ對シ攻守ノ戰爭ニ任シ朝鮮國ハ日兵ノ進退及其糧食準備ノ爲メ及フ丈ケ便宜ヲ與フヘシ

第三條

此盟約ハ清國ニ對シ平和條約ノ成ルヲ待テ廢罷スヘシ

P.V.M. 3 192



此レカ爲メ兩國全權大臣記名調印シ以テ憑信ヲ昭ニス

大日本國明治二十七年八月二十六日 特命全權公使大島圭介

大朝鮮國開國五百三年七月二十六日 外務大臣 金允植

大朝鮮兩國盟約

大朝鮮國政府允約於朝鮮曆開國五百三年六月二十三日以朝鮮國政府將撤退

清兵一事委託駐紮朝鮮京城日本國特命全權公使代爲出力爾來兩國政

府之於清國既立攻守相助之地緣明著事由所繫併期克成兩國共同濟事之

意於是下開兩國大臣各奉全權委任訂定條款開列于左

第一條

此盟約以撤退清兵于朝鮮國境外鞏固朝鮮國獨立自主而推充朝日兩國所享利益爲本

第二條

日本國既允擔承與清國攻守爭戰朝鮮國則於日本隊伍以時進退以及預籌糧餉等諸項事宜必須襄助予便不遺餘力

第三條

此盟約俟與清國和約成日作爲罷約

爲此兩國全權大臣記名蓋印以昭憑信

大朝鮮國開國五百三年七月二十六日 外務大臣 金允植

大日本國明治二十七年八月二十六日 特命全權公使大島圭介



(別紙第二十七號)

○朝鮮政府へ武器返還ノ件ニ付大鳥公使へ訓令
機密送第三七號

七月二十三日ノ事變以來一時ノ權宜ヲ以テ朝鮮軍隊ノ兵器ヲ取上ケ且ツ其警察權ヲモ幾分カ箝制シタル姿ト相成居リ事實上一國ノ獨立權ヲ侵犯セシ形跡有之候處抑帝國政府カ兵ヲ同國ニ派遣セシ目的ハ全ク其積年ノ秕政ヲ釐革セシメテ黨争内訌ノ源ヲ絶チ以テ其獨立ヲ維持シ自主ヲ鞏固ナラシメントスルニ在リテ毫モ其獨立自主ノ權利ヲ侵害セントスルノ意ニ非サルコトハ始メヨリ廟議ノ決スル所ニシテ亦本大臣カ歐米各國政府ノ所問ニ對シ政府ヲ代表シテ公然言明スル所ニ有之就テハ一時ノ權宜ニ出タル行爲ヲシテ此末何時迄モ繼續セシムルトキハ第一外國政府ノ猜疑ヲ招クニ至ルヘク殊ニ露國政府ノ如キハ己ニ帝國政府ニ向テ帝國政府カ朝鮮政府ヨリ受クル所ノ讓與ニシテ苟モ朝鮮カ獨立政府トシテ各國ト締結サレタル條約ニ違反スルコトアルトキハ有効ノモノト不相成コトヲ帝國政府ノ注意ヲ促ス旨ヲ明言シ其底意タルヤ即チ苟モ朝鮮ノ獨立ニ關シ變動ヲ生スルカ如キコトア

P.V.M. 3 195

ルニ於テハ露國ハ決シテ之ヲ默視セストノコトニ外ナラサルヘク又第二ニハ若シ朝鮮ト或外國トノ間ニ於テ或事端ヲ生セシコトアリテ之ニ關シ朝鮮政府警察權ノ行動ヲ要スル場合アリトセンカ目下ノ情態ノ存スル間ハ或ハ朝鮮政府ニ於テ他國ニ向テ其警察權ハ日本ノ箝制ノ爲メ自由ノ行動ヲ爲スコト能ハサル旨ヲ答フルコトナキヲ保セス若シ然ルトキハ帝國政府ハ朝鮮ノ自由權内ニ侵越セリトノ責ヲ免カレサルヘク其極竟ニ他國ノ容喙ヲ招クノ恐れ有リ然ルニ今ヤ一方ニハ朝鮮ハ我同盟タルノ事實ヲ擧ケ又一方ニハ天津條約モ己ニ一片ノ廢紙ニ歸シタレハ右取止ケシ所ノ武器ヲ悉皆返還シ朝鮮政府ヲシテ帝國陸軍士官ヲ聘シテ專ラ兵士ノ訓練ニ從事セシメラレ候様致度隨テ追テ時機ヲ見計ラヒ王宮其他ノ場所ノ守衛兵ノ如キモ可成朝鮮兵ノ多數ヲシテ之ニ當ラシメ漸々朝鮮兵ノミニテ之ヲ守衛セシムルコト、被成度將又警察制度ノ如キモ此回派遣ノ巡查百名ヲシテ其常務ノ外同國警察官吏ヲ誘導訓飭スルノ勞ヲ執ラシメラレテモ不苛要之勉メテ其獨立ヲ維持スルノ要具ヲ備ヘシムルコト最モ必要ニ有之候但シ前記武器返還ノ時機ノ緩急ヲ見計ハレ候コトハ全ク閣下ニ御一任可致候而シテ此ノ如クスルト

P.V.M. 3 196



キハ一ハ以テ朝鮮國人ニ對シテ帝國政府カ公平無我ノ意ヲ表示スルニ足ル
 ヘク又一ハ以テ他各國ニ對シテモ帝國政府ノ行爲ヲ防護シ彼等ヲシテ喙ヲ
 容ル、ノ地ヲ作ラシメサルニ足ルヘキ義ニ有之尤モ目下清國ト開戦中ノコ
 トナレハ百事ヲ舉ケテ皆平和ノ時ニ於テスルカ如キコトハ固ヨリ情勢上許
 サ、ル所アリト雖モ同時ニ苟モ朝鮮國獨立ノ体面ヲ全フシ併セテ同盟ノ實
 ナ舉クルコトハ眼前ノ急務ニ有之候間閣下ニモ能ク此意ヲ体シテ萬事御措
 置相成度又今日マテ帝國政府カ執リ來リタル此等ノ臨機應變ノ行爲ニ付其
 地駐在ノ外國外交官ヨリ萬一閣下ニ向テ疑問等モ有之候節ハ閣下ハ此ノ訓
 令ノ意味ヲ以テ口頭ノ御答相成不苦候尙ホ此義ニ付テハ當該軍衛ヨリモ其
 地へ派遣ノ帝國軍隊總指揮官へ同様ノ旨訓令相成候
 右及訓令候教具

明治二十七年八月九日

外務大臣陸奥宗光

在京城

特命全權公使大鳥圭介殿

P.V.M. 3

197

(別紙第二十八號)

○朝鮮國ノ獨立權ヲ侵害セサル様注意スヘキ旨大鳥公使ヘ訓令
機密送第四五號

帝國政府カ朝鮮政府ニ對スル行爲ノ義ニ付テハ本月九日機密送第三十七號
信ヲ以テ及訓令置候義有之候處即今ノ形勢ニ就テ言フトキハ帝國ハ已ニ清
國ト交戰中ニ有之而シテ軍略上ノ都合ヨリシテ總テノ陸兵ハ釜山ヲ以テ上
陸地トナシテ縱横ニ朝鮮國內ヲ通行シ尙ホ今後ノ戰鬪ノ進行ニ依リテハ單
ニ其國ニ屯在スル清國軍兵ヲ同國境外ニ驅逐スルニ止ラス或ハ道ヲ同國ニ
假リテ直チニ清國疆域ニ攻進スルノ已ムヲ得サルニ至ルヘキヤモ不被計實
際ニ於テハ朝鮮國ハ恰モ日清兩國ノ戰場若クハ戰場ニ達スヘキ通路ノ如キ
姿ナルヲ以テ之ニ對シテ全ク平和ノ時ニ於ケルカ如キ手段ヲ執居ルコト能
ハサルコトハ勿論ノ義ニ有之候得共本問題ニ關シテハ帝國政府ハ己ニ歐米
各國政府ニ向テ公然言明シタル所モ有之候得ハ其外交上及軍事上ノ行爲ニ
至テハ總テ右等各國ニ向テ其責ニ任セサルヲ得サレハ外交上ニ於テモ將々
軍事上ニ於テモ著シク國際公法ノ範圍外ニ軼出スルカ如キ行動無之様極メ

P.V.M. 3 198

テ慎重ヲ加ヘサルヘカラサル義ニ有之尤モ今日ノ場合一方ニ於テハ朝鮮國
内ニテ頻リニ戰鬪ノ設備ヲ爲シ又同國未曾有ノ改革ヲ舉行セシムル等ノ權
變ヲ行ヒツ、他ノ一方ニ於テ國際公法ノ常軌ニ循守セントスルコトハ時ニ
或ハ牽掣ヲ生シテ不便ヲ感スルコト少カラサルヘケレトモ去迎又之カ爲メ
ニ他強國ノ非難ヲ招キ帝國政府ヲシテ殆ント其答辭ニ苦ムカ如キ地位ニ陷
ラシメ候コトハ決シテ策ノ得タルモノニ無之要之今日朝鮮國ノ地位ハ我カ
同盟ニシテ敵國ニ無之候得ハ終始同國政府及人民ノ敵意若クハ怨心ヲ引起
サ、ル様注意ヲ加フルコト最モ肝要ニ有之又第二ニハ我ハ己ニ朝鮮ヲ獨立
國ト公認シ且ツ其疆土ヲ侵畧スルノ意ナシト明言シタル以上ハ言行ノ一致
ヲ保ツ爲メ其獨立國タル面目ヲ著シク毀損スルカ如キ行動及其疆土ヲ實際
ニ畧取シタルカ如キ形跡ハ可成之ヲ避ケ我軍隊ノ運動ノ如キモ總テ朝鮮政
府ノ同意ヲ得タルカ若クハ朝鮮政府ト一体ノ運動ヲ爲スカノ實ヲ舉クルコ
ト肝要ニ有之又帝國政府ニ於テ朝鮮政府ニ向テ其政治上ノ改革ヲ勸告スル
ニ付テハ單純ナル勸告ニ止マラスシテ時宜ニ依リテハ多少強勸勉從セシム
ルコトトモ可有之又軍事上ニ於テモ種々ノ補助ヲ要求スル場合モ可有之候

P.V.M. 3 199

得共此等ノ勸告要求モ時トシテハ同政府又ハ人民ニ於テ堪ヘ得サルノ感ヲ生スルノ恐レナシトセス無論今日ノ處ニテハ同政府モ到底我ニ依頼セサレハ其獨立ヲ保全スルコト能ハストノ觀念ヲ有スルモノ、如クナレハ我勸告我請求ニ對シテハ萬事勉強シテ相應シ居候ニハ相違無之候得共我要求過度ニ至テハ彼竟ニ堪ヘ得スシテ不本意ナカラモ情ヲ他歐洲各國ヨリノ駐在官ニ訴ヘ我勸告要求ヲ猶豫シ若クハ延展センコトヲ求ムルニ至ラサルヲ保セス殊ニ或國政府ノ如キニ至テハ常ニ其乘スヘキノ機會ヲ待居ルコト判然タレハ若シ一旦如此機會若クハ口實ヲ與フルトキハ必ス巧ミニ朝鮮政府ヲ籠絡シ竟ニハ日韓間ノ關係ヲ轉シテ其國ニ涉ル關係トナシ朝鮮政府ニ代ハリテ我ニ抗議ヲ試ミルニ至ルコトナキヤモ難計就テハ此際帝國政府ニ於テハ務メテ事ヲ慎重ニシ第三國ヲシテ容易ニ容喙干涉ノ端ヲ得サラシムル様注意ヲ加フルコト肝要ニ付左記ノ三箇條ヲ本大臣ヨリハ閣下ヘ又當該軍衙ヨリハ其國ヘ出張ノ陸海軍總指揮官ニ各訓令ヲ發スヘキ様廟議決定相成候

第一 苟モ朝鮮ノ獨立權ヲ侵害スル如キ行為ハ軍事上不便若クハ不經濟ニ涉ルコトアルトモ可成之ヲ避クヘキ事

P.V.M. 3

200

第二 朝鮮政府ニ對スル請求ハ時ニ已ムヲ得サル場合可有之ト雖モ其請求ノ程度ハ朝鮮政府獨立ノ体面ニ對シ及新設政府ニ伴フ經濟上ノ關係ニ對シ堪ヘ得ヘキ度合ヲ限トシ竟ニ朝鮮政府ヲシテ我要求ニ堪ヘサルノ感ヲ起サシメサル様充分注意スル事

第三 朝鮮ハ我同盟ニシテ敵國ニ非サレハ同國ニ於テ軍事上及其他ニ必要物品アルトキハ成丈其満足スヘキ代價ヲ與ヘ決シテ侵掠ノ形跡無之様深ク注意スル事

前述ノ通廟議決定ノ旨ニ從ヒ此義ニ付當該軍衙ヨリモ其國出張陸海軍總指揮官ヘ綿密ナル訓令可有之筈ニ付閣下ニモ能ク右廟算ノ在ル所ニ從ヒ萬事充分御注意御措辦相成度候

右及訓令候敬具

明治二十七年八月二十一日

外務大臣陸奥宗光

在京城
特命全權公使大島圭介殿

P.V.M. 3

201